

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十卷

第十号



日本幼稚園協会

幼児教育界をリードする新書判シリーズ

フレーベル新書

好評

発売中!!

◎「フレーベル新書」は、幼い子どもとかかわりのある
保育者、父母、学生のための新企画です。

◎あなた自身の…子どもをみる目(児童観)、幸福を願
う心(理想像)をもつために新しく誕生しました。

1. リナはどうやって 文字を覚えたか

フリードリヒ・W・フレーベル著
莊司雅子訳 定価 三三〇円
今日、幼児教育界の中で文字教育がとやかく
いわれているが、フリードリヒ・W・フレー
ベルは、百二十年前すでにこのことについて
語っていた。

2. 保育者への 一つの指針

平井信義・乾 孝・金沢嘉市・城戸幡太郎
八杉龍一著 定価 三六〇円
保育者とは、社会にとって何が、子どもにと
って何か。また保育者なら誰でも持つなやみ
まよいについて、選ばれた見識者たちが、あ
なた自身に語りかける、小論集。

3. 対談

しごとと生きがい

〈聞き手〉多湖 輝 〈話し手〉江上トミ・淀川
長治・林 寿郎・杉村春子・朝倉 摂・石垣純二
大野 晋・今井通子・中西悟堂・山田徳兵衛・高
井俊夫・宮城まり子・斉藤茂太・清家 清・真鍋
博(掲載順) 定価 三六〇円
料理研究家、映画解説者、動物園園長、舞台
人、画家……各界の第一人者として活躍中の
十五人に聞くしごとの話。現代人の求める生
きがい、その底に静かに語られている。

以下続刊

幼児の教育

第七十卷 第十号





幼 児 の 教 育 目 次

— 第七十卷 十月号 —

表紙 小野木 学
カッ ト 斎藤 信也

★講演

幼児教育に「哲学」を……………周郷 博…(4)

自然をとりもどす保育……………塩川 寿平…(15)

保育者の生きがい……………堀合 文子…(28)

私の保育……………平野 信子…(32)

わが幼稚園……………河井多喜子…(37)



★ユートピア

三歳児のかわいいことば

村石 京子…(42)

ある声楽家のため息

小野 邦代…(46)

★こんな本・あんな本

関 治子…(53)

手先の動きと子どもの感情⑭

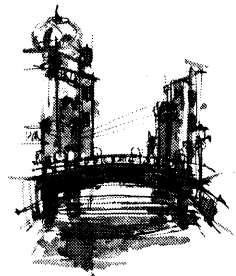
清水エミ子…(56)

小学校入学直前の幼稚園の生活⑬

お茶の水女子大学幼児保育研究室…(66)

幼児教育に『哲学』を

周 郷 博



今頃は一ツ橋講堂にいて、日中文化交流の会があつてその中の北京科学シンポジウムの日本の準備会に出てたんです。

で、岬君というのが非常に爆弾的な発言をしたんで遅くなつてしまいました。

彼がいったことは、支那の方も中国の方も、一九六四年に北京科学シンポジウムっていうのの第一回目をやったけれど、文化大革命でそのままやらないできているわけね。むこうも変わってきているわけだけれど、ある人は政治的な問題としてなにか発言したらいいというように考えているんだけど、岬君の考えはそうじゃないんだな。科学シンポジウムというのは、科学とは、あるいは学問とは何かということをはっきりさせるということなんでね、そこに焦点を置いて考えなきゃいけないん

で、北京の方ばかり見てないで、日本の問題を本当に考えなきゃいけない。そうすると日本の科学とか学問とかいつてるけど、これは随分間に合わせのいいかげんなものなんじゃないか、ここが問題なんだ、というのが彼の意見なんですよ。

ぼくはそれに賛成なんで、日本に大学ができた幼稚園ができた、みなさんなにか学問してるみたいな気がしているけれども、あれはやっぱり根本的に考えなくちゃいけない問題だと思います。ぼくは科学なんて言葉に弱すぎるけど、科学とは何かということ、児童心理という、まあ科学か学問か、それはいったい何であつたかということを根本的に考え直さなきゃいけないんだ。生半可な知識で物がわかつたような気がしているのはいけないんだ、ということを考えているわけです。

で、根本は何か、学問とか、科学とか、哲学とかいうものがなければ、やっていることに意味が出てこないわけです。物質とか実利とかいうもんじゃなくて、思想といってもいいんだけど、人生観とか世界観、哲学とかがはつきりしてくると、我々の身のまわりが変わってくるんだ、とこの間から考えているんだけれど。

ヨーロッパの人は、きょう、あすのことだけを考えているんじゃないんですよ。物事を根本的に考えています。日本人はなにか間に合わせばかりやる。そしてこう小器用にね、その時代に入ったようなことをいいながらね。たえずいろんな単語を輸入してきちゃね。ぼくのところへ変な許可を頼みに来たんだけど、ホームルームのなんとかを作るんで、ぼくが訳した「どうしたら幸福になれるか」の中の文章を引いてさ、あれを出すことをお許し願いたいなんてね。考えてみたらホームルームなんてなんだろうね。あんなことをいってれば新しい教育がわかる気がするんだね。なにか新語を覚えてればかつこうよかつたり、なにか思想をもってるか、哲学をもってるかのような感じがしてるんだね。これは間違いです。

イザヤ・ペンダサンは、それは日本人はソロバンというのが世界中で一番うまいんだね、あれで鍛えたんで、日本人がもっ

ている言葉というのは、語呂盤というやつで、ソロバンはじくみたいに、なにか新語をもつてくると、うまく、どういう方法ではじき出すかは知らないけど、変な、こう間に合わせの結論をもつてくる。そして次の時代になったら、次の結論を語呂盤で出してくるんだそう。そういうてますけどね。

今、日本にないのは哲学なんだけれども、アメリカも哲学が死んでしまったんで、教育もごったがえした状態です。でも日本と違ったところは、批判する精神があります。日本人みたいに、体制順応でずるく構えてるんじゃない精神がありますよ。

人間とは何かということも、教育とは何かということも、本当に既成概念で、つまり日本人が覚えている言葉で、解決の道がみつかるなんてことはないんです。大文字で EDUCATION と書くんだねーそしてそれを見つけないといけないところへ来ているんです。今までの惰性で教育を考えてちゃいけないんだね。大文字の教育にかかわりのある教育を見つけ出し、それを作っていくということが、現代の教育の哲学というものの中核にある問題だ。というのは、フランスのガストン・ミアラレの言葉だけれども、現代の哲学の問題の中心は教育の問題である。というのは、スーザンヌ・ランガーの考え方です。アメリカの女の人です。

今度、四月から使われるようになった国語教科書を見ると、字が多くなりましてね。漢字も多くなりました。しかし、ぼく、それをふっと見ましたらね、おもしろくないですよ。字を教えれば教育だと思ってるんだ。これはまた、随分古くさい考え方です。そして、この教科書の文章の中に、哲学も科学も、文学もない、ということをはくは感じました。これは、日本の教育に哲学も文学もない、ということとひとつづきです。あるのは技術なんです。技術じゃ、死んだ知識を覚えさせるというだけです。そしてそれをテストするんです。だからぼくは、小学生なんかあの教科書を見て、そして先生の顔を見ると、学校なんか来るんじゃないかと思ってるんじゃないかなと思います。

こういうのにくらべれば、フランスの国語教科書とか、ロシアのだって中国のだって、やっぱり哲学がありますよ。国語というのは大事ですよ。ロシアの一年生の教科書の一番初めに出てくるのは、「レーニンはいかに学習したか」というのです。日本の明治天皇にあたるのがレーニンです。つまり、中教審の人間像と違うんだよ、本当に生きていた人間を指導者として出すんです。

まえにぼくが書かされた本の中に引用しているけど「狼と表おもて

刈る人」なんてのは哲学があるんです。それは、百性が表を刈ってたら狼おおかみの中から出て来て、百性が食ってるパンを見て、「随分うまそうなものだけど、どういふ風に作るんだ」って聞くんだ。まず、前の年に畑をたがやすんだ。それから種をまくんだ。なんていうと、狼が「そんなまだるっこいことやってるんなら、オレはすぐ食えるものが欲しいんだ」ってね。その最初のところで百姓が、「人間というものは、働かなければ食えないものだ」というのが出てくる。哲学もあるし、文学ですよ、これは。人間とは何か、を語っています。

しかし現実の日本の人間は、すぐ食える物が欲しいらしい。もはや狼おおかみになってるんです。畑をたがやして、種まいて、それからまた待つてなきゃならない。それから次の年になってだんだん伸びて、それが黄色くなつた時に刈ってそれを干して、今度は、粉にひく。実に面倒なことだけど、それだけのことをやって、人間はやつと食うことができるようになるわけです。ところが今の子どもたちはどうですか。狼おおかみに近くなつてない？そして、ぼくらがそもそも狼おおかみになつてるんです。

きのう、教育学科の先生たちと話して毛沢東語録を読んだんです。ぼくはね、これをおとしロンドンのハイドパークで、英語を買ったんだけど、今年日本語のやつを買いました。

これを読んでたら、いいねえ、っていうのはちょっとじゃわからないんだ、ちよつと読んだだけじゃなんとも思わないんだ。これはわかりいいから、よくわかるのを二ついうからね。ぼく、毛沢東語録の宣伝にきたんじゃないよ。(笑声)

世界中、哲学ってのは大きくわけて二つになっちゃったわけです。一つは分析哲学、言語分析です。人間が使っている「言葉」が、本当かうそかということを実証する、というのが分析哲学、すなわち論理実証主義です。フランスのリクールやなんか、構造主義という中で言語の問題を非常に大きく問題にしています。人間は言語というものをもっているけれども、ただ惰性で使っているんじゃないんで、言語というのは道具と似てますから、この道具が間違っていたんじゃないのもできないわけです。

もう一つは実存主義です。これは現象学から出てきて、ハイデッカーやサルトルの実存主義というものになっている。これは人間中心で、これが悪くなると自分中心になっちゃう。日本で実存的になるっていうのは、自分の悦楽にふけていることなんです。それをまあ、エゴイストといってもいいんだね。しかしエゴイストってのはもう少し立派なものなんだな。シモーヌ・ド・ビュイッってるけど、善悪をこえることが必要です。し

かしね、今の人間は善悪の下に落ちちゃったんで、善悪がわからないで自分の欲望にふけているんだ。まあ、こういう風に哲学がなっています。そして教育に必要な人生の哲学というもの、あるいは宇宙論みたいな大きなものの中に、自分の位置づけができなくなっています。それに比べると、毛沢東語録なんか哲学もあるし心理学もあるんです。

それで、毛沢東語録だけど、平凡な言葉でいってるけど、実に、あとで胸があたたまってきたってわかるという言葉です。

「わからないことや知らないことは、下の者に聞くようにし、軽々しく賛成、または反対してはならない」

わからないことや知らないことは、下の者に聞くようにするんです。幼稚園でこれをやってごらん下さい。必ずよくなると思うから。そして、軽々しく賛成しちゃいけない。子どもがうまいことをいった、なんておだてちゃ増長しちゃうからね。(笑声) 軽々しく反対しちゃ、なおいけないんだ。だって反対されれば、子どもはもう考えたっておもしろくなくなってしまう。その次は「我々は決して、知らないのに知ったようなふりをしてはならない」

実に、何でもないようだけれどね、こまかな、人間が変わってくるような感じですよ。今の日本では、知らないのに知ったふり

をして、そのごまかしでおるんだな。それからカギがあつて、

「下問を恥じない」下の人に聞くのを恥としない、とカギに入っています。「下問を恥じないようにし、下級幹部の意見によく耳を傾けるようにしなければならぬ」なんでもないようだけれども、耳を傾けるように書いたんです。

「まず、生徒になつてから先生になる」初めから先生になつちゃダメなんだ。

「下級幹部の言葉の中には、正しいものもあれば正しくないものもあるから、聞いた上で分析を加えなければならない」これを幼稚園の先生と子どもの関係で考えてごらんない。子どもがこんなことをいった、「子どもは本当に神さまみたい」そんなことってちゃダメなんです。正しいこともいつてゐるし、間違つてゐることもいつてゐる。子どもが何かいつた時に、必ず耳を傾けなきゃいけない、そうしなきゃ彼は成長しないんだ。

「下からくる間違つた意見にも耳を傾けなければならない」

「頭から聞こうとしないのは間違つてゐる」

「それに批判を加えるようにする」

というのがこの一節です。幼児教育の原理も、会社経営も同じように、こうすれば幼稚園がいきいきとしてくるはずだ、とばかりは感心しました。

もう一つ、これは三行しかないけれど実にいい。今の日本の社会のようになつちゃうと、非常に複雑で、なにか一つのことだけでえらく興奮しちゃつて全体が見えなくなつちゃうんです。

「世の中のことは複雑で、いろいろな面の要因によつて決まる」毛沢東はここに三行でいつてます。

問題は一面から見るのではなく、いろいろな面から見なければならぬ。幼児教育だって、六領域とかカリキュラムばかり見たつてダメなんです。いろいろな要因があつて複雑なんですから。我々は、全体を見ることがはるかに離れましたね。全体をいつまでも見ることができないのは、人間のおろかというかもしれないけれど、我々が一面しか見ていないことはたしかですよ。

人間の、全面的な能力を発揮するというのが、人間の喜びです。一面的な知つたかぶりで、世渡りはできるかもしれないけど、もっと生きがいのあること、自分一人だけじゃなく、まわりの人も生きてゐるということに意味を見いだすようにするべきです。こういう意味で、毛沢東語録を読んでいると、中国には哲学があるし、これは詩みたいなもので文学があります。

ヨーロッパのいろんな国が、共産圏もいつしよになつて出している雑誌で、「全面発達とは何であるか」がとり上げられてい

ます。ぼくは、全面発達というのは、労働することと、芸術がわかるということだと思えます。毛沢東は、

「我々は無私の精神を完全に学ばなければならない」

とっています。これをイギリスのティヤール・ド・シャルダン協会の会長、ジョゼフ・ニーダムが聞いて、キリスト教社会主義を信じている我々としては、この考えに拍手喝采せざるを得ない」とっています。

中国全体が無私の精神を学んでいるんで、それが文化大革命なんです。無私な精神とは、芸術が本当にわかった時にそうなるんじゃないかな。音楽が本当にわかった時、本当にわかって涙がポロポロ出てきた時は、人の物を欲しがるという気持はなくなるね。ほしがりません、勝つまでは」なんていったってダメなんで、おのずからはしくなくなるんです。それが今の教育にはない。欲のかたまりになってしまって、テストで何点になったとか、どこの幼稚園に入ったとか、まったくうつろなことを自慢してるんです。それで今、中国は全体的に生き返って、日本はアメリカの真似をしすぎて頭が変になっちゃったんです。この状態では、どうしたって気抜け人間になっちゃうと思えます。

日本はどうしても企業家の国です。この間シンガポールから、

シンガポール大学の教授で経済学の人、華僑です、がきて話したことを覚えているんですけど、エコノミックアニマルとはもういわないんです。それでは間に合わなくて、モンスターというそうだ、怪物ですよ。エコノミックアニマルというのは、パキスタンの、当時外務大臣だったブットという人がいったんですけど、シンガポールの方では、いつでも軍国主義になる危険をもっている、という意味でモンスターというのだそうだ。

しかし、まわりがそういう風であればあるほど、我々は幼児教育からでも建て直さなければならない。できそこなったおとなはしょうがないよ。森で新しい木を育てなきゃならないから古い木は倒れていく、そういう風に幼児教育を考えることは、他のどんな問題よりも重要なことだと思う。

ラッセルがいつてるとおり、先生やおかあさんが、心理学とかフロイドとか生半可な知識でわかったように思っ、子どもを自分の手段にしようと思ってる。しかしなんとなく不安になっている。この気持が子どもにも影響を与える。おかあさんから、その不安をとりさなくてはいけない。もっとスパッと「これ、いけないんだよ」とちゃんといえ、子どももよくわかる。なんだかきげんとしてごまかしてるみたいでは変です。ところが、せっかく生まれてきたけど、おかあさんの気持があれこれゆら

いでいるらしい、しょうがないからアイスクリームでも買ってもらって、一時慰めておこう、ということになる。

確信をもっているが、毛沢東語録みたいに、子どもに聞いてごらんさい。変な策略で聞いちゃだめ、「おかあさんは本当にこれを聞きたいんだ」といってごらんさい。そして子どもの意見に簡単に賛成したり反対しちゃいけない。そうすると子どもは変わってきますよ。

知識じゃなくて、あることを勉強したら「心理学としてここだけわかったけど、まだわからないところがある。しかしこれは、私の今までの感覚やなんかで補っていかなければならない」そう考えて、まず自分の物にしなければいけない。そして、子どもの方へ向かって行くべきです。自分の心がにこっているかぎり、それが子どもに影響を与えているんです。ぼくは去年の暮からそういう経験をしているんです。

子どもに話をする、チビに話すのは、実にぼくはおそろおそろするんです。このごろの子どもたちうるさいだろ。だけど、今年の修了式の時、父兄と、父兄の友だちが、バイオリンとチェロを持ってきて、モーツァルトを四曲やったんだ。それも、ごちそうを食べつくして、子どもは受持の先生と別れなきやならないんで甘えちゃってバタバタしてるでしょ。モーツァルト

なんか始まったらうるさくなるだろうと思ってたら、非常に一生懸命でうまいんだな、シーンとしちゃったな——。

おとなたちが、本当に何かやってる姿は、子どもたちを感動させるんだ。子どもの方なんか見てないし、ごきげんとりなんか一つもやってないんだ。そしてそのあと「螢の光」をやったんだな。すると今度一年生になる女の子が、泣いてる真似をして、その内に泣き出しちゃったんです。ここがおもしろいんです。子どもは、まずからだでおとなの真似をします。そのうちに、その行動にともなっている心までできちゃうんです。

これに比べて、電車に乗っているおとなを見たってなにか変な顔付きしてるんだな、自分のことしかわからないで、欲深く行動したあとのうつろさみたいな顔してるでしょ。(笑声)そして、テレビを見てごらんさい。おとなのやってるのは悪ふざけばかり、子どもがよくなりっこないですよ。おとなたちが真剣に生きていることを子どもたちに見せなきゃ、見せるんじゃない、おのずから見せる結果にならなきゃ。

四月になって新しく入ってきた子どもたちに、ぼくは一つ詩を朗読しようと思った。「おとなというものは、ヘンなことを考えているんだ。おまえたちはまだチビだけど、今聞いたってよくわからないだろうけど、覚えとけ」というんでやろうと思う

たけど、うしろの方のおかあさんたちがね、あまり興奮してる
ようなので止めたけど……。でぼくは、あんたたちは、三年か
四年たつて足もよく歩けるようになったし、目もよくなったし、
手も働くようになった。電車に乗ったら席をさがすようなこと
をやっちゃダメだ。立ってなさいといったんだ。ぼくがそう話
したら、子どもがシーンと聞いていたそうさ。そして子どもの
顔がよくなったそうさ。うれしさが表われてきたんだそうさ。
「座席ばかりがしている子どもは、この幼稚園の子じゃない
んだ」といったんだね。それから何日かたつて幼稚園にきてね。
「ぼくきょう立つてきたよ」と報告してきたよ。

ぼくはちつとも子どものごきげんをとってないけれど、誠意
をつくしています。幼児教育の問題は、本当にぼくら、まじめに
考えていきたいと思っています。

ヨーロッパで幼児教育というのは、十九世紀初めにキンダー
ガーデンというのを、ドイツのフレーベルが考え始めました。
しかしフレーベルというのは、宗教的な神秘的な思想をもつて
いた人です、宇宙論みたいな。

そのあと二十世紀の初めに二人います。一人はベルギーのオ
ヴィド・デュクロリーという人でお医者さん、もう一人はイタ
リーのマリア・モンテッソーリ、これもお医者さんです。この

二人は幼児教育なんて簡単なことじゃなく、人間というものを
生物学的に理解しようとしたんだ。ピアジェだってそうです。

ピアジェは、アルプスの生物を調べてた人で、生物のうちの人
間を理解しようと思って、「人間を理解するには子どもを理解し
なければ」というんで子どもの研究をやってるわけです。目
的は、人間とは何かということをピアジェはやっている。知的
な活動とは、どういう風にして言葉とか認識とか、人間がもつ
ている能力が、子どもの中にどういう風に作られていくか、と
人間を理解するためにやっている。

モンテッソーリとデュクロリーは、一九〇七年にモンテッ
ソーリは「子どもの家」、デュクロリーも同じ年に小さな塾はなを作る
んです。彼はまだ若いじぶん、四十にならないころ、しかし子
どもといっしょに暮してたら、人類の未来というものの、教育と
いうものを考えざるを得ない状態になって、塾はなを作るんです。
そして二人とも、生物としての人間、を問題としているうちに、
人間の子どもの成長と、その子どもたちのサイコロジとを理
解しようということにきたんです。心理学の知識から子どもの
生理とか、生物的な姿を勉強してるんじゃないんです。

フレーベルについても、フレーベルは子どもの遊びというこ
とと、子どもの保護ということを主として考えた。子どもは神

の子であるというルッソーの考え方、子どもの自然を大切にすると、
というふうに考えた。しかし、十九世紀の初めにフレーベルが
考え始めた考えを、知識としてあとの人はもっているわけで、
フレーベルの考えを、「おとなが子どもにおしつけている」とい
うことになるんだそうだ。つまり、遊びが大事である。子ども
は守られていなければいけない。子どもの自然な成長を大切に
しなければいけない」ということを自分で感じて、ここで発見
したんじゃないかと、それを「知識としてもっていた」のではない
、というわけです。今、フレーベルがこの時代に生きて
いたら何をやるか、を考えなければいけない。

一九二〇年ごろから、ロマンティックな時代じゃない科学、
技術の時代になって来た。デュークローリーなんか、アブノーマルな
子どもからノーマルなものを学ぼうとしている。日本は、初め
からノーマルな子どもだけを相手にしている。この二人は、ア
ブノーマルつまり精薄とか身体障害とかいう子どもから、ノ
ーマルな子どもを理解しようとしてやっただけです。

デュークローリーの考えたことを簡単にいうと、「教育について語
るということは、まず、何よりも小さい子どもについて語ると
いうことだ」そして、「この小さい子どもというのは、すべての
民族がもっている、基本になる資本なのだ」といっている。ま

た、小さい子どもの教育について語るということは、未来につ
いて語るということですよね。デュークローリーはその未来の方向
ということに大きな興味をもって活動していた。未来のための
個人、未来のための人類ということの、なみはずれた重要さを
本気になって考えた。

次に、「我々は、この子どもたちを、生まれて間もない初期の
時代に、特に助けなければならない。けれども、子どもを教育
するといつて、そういう言葉を使って、おとなたちのディフォ
ルマシオン、おとなのみにくい姿、いやらしさ、できそこなっ
たおとなというものの、ウィルス(ばいきん)を子どもたちに感
染させてはならない」私は教育をやってますといながら、お
となたちのいやらしいウィルス、ばいきんみたいなものを、子
どもたちにまきちらしているのがいます。

現在日本で考えるべきことも出ています。野原と小川の流れ
と森、これは何千年、何万年と人間の環境として存在してきた
ものです。デュークローリーは、子どもの教育のために必要なこれ
らは、どんなほかの物よりも大切だと考えたんです。森や川や
野原で育った方がいいんだ。そういうところでおとなの労働を
手伝うということ、それはどんなことよりもすぐれた道徳教育
になった。人間らしい感受性の教育になったといっている。

次に、小さい子どもの教育で、何か知らないということは、

意味のあることだといっています。最もいい教師は、知らない教師だっているんです。誠意があり熱心だと、熱心な無知な人の方がいいんだって。皆さん安心したでしょ。無知ってバカという意味じゃないんです。そういう先生といっしょにいますと、子どもたちが何かやる気を、好奇心というものが、生き生きと出てくるそう。

そしてデュークローリーにとって、教育というのは次の二つの言葉に集約できるという。彼が考えた教育とは、考えることと、やるということー行動すること、である。遊びも、何か作ることも、お手伝いもすべてこの二つである。そしてこの二つは、子どもにとって先が長い、ずっと先の目的、人類の未来というものに対して自分が何かの役割を果たしているということなんだ。これはフランスの戦後の教育改革を行なったランジュヴァンという人もワロンも、この教育の考え方について共感しています。

もっといいことは、デュークローリーにとって、教育の仕事というのは、科学と芸術の両方のことよってないうる、といっている。生物学までを含んだ科学と、一方では芸術的タッチ、芸術家のもっているような能力、この二つが教育を成り立たせ

ているんだと考えたんです。

日本人は、科学といえば技術だと思っちゃってるよね。科学というのは、自然と人間、宇宙と人間でもいい、この関係をどうつけるかというのが課題です。それを技術にしちゃって、日本人は科学はわからないっていつている。そして教育も技術になっちゃった。そうじゃなくて科学ー科学と芸術なんです。

そしてもう一つ彼は、教育という仕事の基本的相対性 *relativity* ということをいつている。つまり、教育というのは、こちらがどういう態度で出るかによって、向こう側が変わってくるということです。教育という学校があつて子どもに教えるのじゃなくて、ここにいる人間、おとなたちがどうかということによって子どもにだけ問題があるのじゃなくて、教師に問題があり、社会にも問題がある、これを相対性といつたんです。デュークローリーについて考えてみることは、特に公害が多くなり、大都市、過疎現象があつて、どんどん自然が破壊されて子どもの世界から遠ざかっている時、非常に必要なことだと思います。

モンテッソーリについては皆もずい分興味をもっているけれど、この人の考えたことは、そう皆にはわからないんじゃないかな。モンテッソーリの考えたことは、まさに自学、フレールベルミたいに保護しているんじゃないかって、子どもに訓練を課すわ

けです。自分でやりとげさせる。子どもに甘くない。自分の力で成長させ、自分の個性的でないものを、自分で発見させて伸ばしていくという訓練の場を、与えているんです。

モンテッソーリは学校、デュクロリーは学校というよりも、ワクをはずして教育を考え直さなければならぬといっているけど、二十世紀の始めにモンテッソーリは、学校とは、非常に広大な広がりをもった、人間研究の「フィールド」である、と考えているんです。そしてそれは教育的なクリニック、治療の場所です。この教育的なクリニックというのは、その重要さから考えれば、どんな教科目の寄せ集めと比べてみても重要だ。

つまり教科目だけ教えこめばいいんじゃないなくて、人間というものを体験する「フィールド」です。そこで、人類の文化が実際に見出だされていくところの「フィールド」であって、ここで人間とは何か、ということの研究しあって、「種としての人間」と、「社会的単位」フランス人とかロシア人とか、としての両方の面での人間が、もっと、より完成したものになっていくことを目的とした「フィールド」である。モンテッソーリは、最初に書いた「教育学的人間学」の中に、学校というものをこういうふうに書いています。随分日本と違います、日本では東大に入る階段だと思っている。むしろは、人類をもっと完成してい

く、つまり「種」として一動物に比べた人間という「種」それからいろいろな民族として、人間がより完成した姿になっていくことを願って研究している「フィールド」なんです。研究ばかりでなく、クリニック（治療）の場所です。

で、ぼくはやっぱり日本の問題として、我々のこの環境、自然破壊も含めて、お金さえあればどうでもいい、なんでもやれると思っている状態も、日本人が、偉大な「思想」、あるいは「哲学」、「人間観」でものをもち直ささえすればかわってくると思う。そしてこの「思想」の中核に小さい子どもたちの教育が入れば「鉄くずが磁石でパツときれいなパターンになるように」そういう事態が生じてくると思います。（みどり会研究会講演）

自然をとりもどす保育



塩 川 寿 平

一 保育と遊び場

保育の本質は子どもの生命活動のすべてをさすのであり、一・二の保育活動をさして保育が論じられてはならない。今日ややもすると机に向かった保育活動が保育であり、直接知育にかかわらない活動は、保育の補助的活動として一段軽くみられる傾向がある。こうした傾向は保護者のニードに多く見られるわけであるが、専門の保育者でさえついまどわされがちである。今日あらゆるものが数量化され、その数値によって評価される時代にあつては、保育活動においてさえ目に見えるもの、数で表わされる物に努力が集中しがちである。今日いわゆるコンピュータ時代とは、そのような努力を私たちに求めがちである。しかし、私たちが保育の本質としてめざすものは、子どもの人

格そのものをはぐくむことなのである。人格のある一面を数量化して評価することは、人間のもっている一属性についての評価にすぎないのであり、すべてではない。特に、子どものもっている無限の可能性は、おとなが教えるとか与えるもの以上に、はるかに多くの可能性をもっている。

それゆえに、まず第一に私たちのなさねばならない努力は、子どもの無限の可能性に十分こたえていく環境条件の整備である。子どもの生活が遊びによって組立てられていることを考える時、当然子どもの全人格の発達を保障する環境条件として、遊び場について検討しなければならない。

また、豊かな人格形成とは、その子どものもっている無限の可能性があますところなく引き出されていくプロセスであり、戸外の遊び場で無心に遊ぶ子どもの姿の中に明らかに見いだす

ことが出来る。

六月下旬のことであるが、私は保育学科の学生の修学旅行に連れられて、十日間という北海道の旅をもった。北海道の雄大な景色に心打たれたことはもちろんのことであるが、広い草原や川原で遊ぶ北海道の子どもの姿に、私は雄大な景色以上に心を打たれた。職業柄というのであろうか、どこへいっても子どもの姿に目を引かれてしまうのであるが、それはすばらしい光景であった。真の子どもに出合った思いであった。

自然の中におかれている子どもたちの目はなんと輝いていることだろう。私が北海道の自然の中で出会った子どもは、例外なく活動している子どもの姿であった。無気力な都会の子どもはの静的な遊びの姿ではなく、人生の一時間でもぼんやりすこすまいと、何かを夢中で追い求める動的な姿であった。何かを追いかけて求めて無心に遊ぶ子どもたちの姿から、生きていることを楽しんでいる、生き生きとした表情を見つけることは容易なことであった。私は「子どもがいる。まさに、生活している子どもがいる」とつぶやいたものである。

ここで大切なことは、子どものある一面を伸ばすことではなく、バランスのとれた人格形成を考えることであるが、この十日間の北海道旅行のあいだ私が考えつけたことは、その目的に最も正しく答えてくれるのは、なんといっても自然の遊び場

であるということであった。

遊び場の本質的価値の理論については、五月号・六月号で述べてきたとおりであるが、豊かな人格として私が希望する児童観

(一) 創造性の豊かな子ども(精神の内的活動の健康)
(二) 社会的役割のとれる子ども(精神の外的活動の健康)
(三) 病気をしない丈夫な子ども(肉体の健康) は、まさに自然の遊び場の中で、バランスよくはぐくまれると考えられるのである。

二 ガラクタ遊び

保育には、自然すなわち広い空間と、十分な時間が必要である。空間は活動のためのスペースであり、時間は成熟のためのプロセスである。自然をとりもどした保育の中で、初めて空間と時間の必要性を確かめてみたい。

*場所〓野中保育園

*観察日〓昭和44年11月21日―12月1日

*対象〓年長児(五・六歳) 最初は四、五人で始まったが、徐

徐に参加者がふえ、最終的には三十人参加。

*遊びの始まり



部落づくり(1)

十一月二十一日、四、五人の男の子が遊び場に穴を掘り、木を立て始めた。「何だい」と聞くと「ジャングルだ」と答えた。

この子どもたちは、先週バス旅行で動物園へ行ったのであるが、それに刺激されたく、ジャングルのゾウを作るのだと言う。ボスの存在の子Y君は、「一生懸命穴を掘っていた。そして仲間に入れてほしい」という子には「板を持って来い」というふうに、仕事を与えることにより、仲間入りを許した。こうして実にこの日から十日間におよんで、遊びは展開され素晴らしいゾウができあがったのである。

*その経過

①十一・二十一 四、五人の男の子が「ジャングルのゾウ」を作り始める。穴が掘られ、ガラクタ置場から材料が運ばれる。この日早くももう一つのグループが生まれる。この第二グループは、第一のグループに入れてもらえなかった子どもたちである。

②十一・二十二 だいぶ出来上がる。さらにもう一つのグループが生まれ、全部で三グループとなり、ジャングル遊びは競争のような形になる。第一のグループは「ゾウ」。第二のグループは「ヘビ」。第三のグループは「くま」と目標が決まっていた。

③十一・二十三 リズムや言語の室内の保育が終わって自由遊びになると、みんな遊び場へかけていくようになる。

④十一・二十四 大風で外へ出られず。

⑤十一・二十五 きのうの大風と雨でジャングル部落はほとんどこわされてしまう。

⑥十一・二十六～二十九 再建。子どもたちは驚くほどよく働いて、こわれたところを次々になおしていく。保母たちも感激して、かげながら応援する。「エルマーの冒険」「ジャングル大帝」「ドリトル先生のアメリカ行き」等の本を読んでやる。

⑦十一・三十 子どもたちは「木箱をちょうだい」とか「ワラがあるといい」などと、保母に材料を請求するまでに熱中してくる。そこで保母は、農家を訪ねワラをもらい、商店へ行き、空箱を集めてこなければならなかった。

⑧十二・一 ついに完成。感激の日であった。

このことについて、園長の保育日誌には次のように書かれている。

『ジャングルの場所の設定が木のない遊び場になったため、いつのまにか部落のような形になった。作品の形がととのつてくると、子どもたちは、ここが玄関、くつをぬぐ所、ここが裏



部落づくり(2)



ゾウさん

口等と家の形態をとって遊ぶ。「だれん、おとうさん」(方言)「だれが」、「わたしおかあさん」「赤ちゃんは二人さ」と家族構成もきまり、遊びながら仕事が続く。

グルーブの仕事といっても一人一人が適材適所に力を発揮している。道具、材料ともに十分与えられ、場所も広大なため取組みがいもあり、ぼんやりしている子がなかった。ゾウグルーブは、話し合いが多いグルーブで、最後までこまかい仕事を続けた。また、てんでに何やら忙がしげに、やたらにトントン釘打ちに熱中しているグルーブもあった。

部落らしくなってきたある日強風注意報が出た。このことを知らせると、真剣になつて石をのせたり、タイヤでおさえて帰った。

翌日ある母親の話

「ジャングル部落だから、のが、作つてあるからつて、夜中に二度も雨戸をあけさせたですよ」

「あけるなつてのにさあ」

子どもたちは完成が近づくと、朝の登園後、カバンを置くなり一目散に遊び場へ走つた。

「もつとしっかりほつていれるべえー」

「おとうちゃんがちょっと来てくれりゃあらくだけんな」

「先生、つぶさないですつと遊ぼう」

……大地を一步一步ふみしめて子どもたちは育つ！」と書いて
いる。

★ガラクタ遊びの要点

①同園のガラクタ置場には、材料の板、角材、トタン、あき箱、棒、タイヤ、その他が管理されている。これらは家のとりこわしなどで無用となった古材であり、地域社会の人々の協力を得て日ごろから補充され管理されている。

②仕事は急ピッチに進み、みんな仲よく働いている。だがよく観察すると、一人一人自分の気に入ったようにやっている。このことは発達心理学がいう、五・六歳児の社会性の芽ばえ他者の立場を認識することと自己主張の接点を如実に物語っている。

すなわち、「ゾウ」を作ろうということでは共通の目的をもっているし、みんなで作るという共同作業であることもわかっている。だが、いざ作業にとりかかると、人のことなどおこまいなく、自分のやりたいように、自己主張を表現して作っていく。だからゾウの「右足」を作っている者と、「左足」を作っている者とはぜんぜんちがうものが出来ていく。また、この年齢の子どもは、非常に発達の個人差があり、集団指導のむずかしいところである。たとえば、発達の差のあるA



クマさん

Bを考えた場合、発達が進んだAに合わせれば、Bには負担であり、Bに合わせれば、Aにとっては課題が低すぎてつまらなくなってしまう。おとなであるならばがまんして平等な作業をするのであるが、子どもたちはまだそこまで発達していない。もしこの年齢で共同作業という社会性に気をとられすぎ、形式的に平等な作業を与える指導を強行するならば、A、Bにとって不幸なことである。それはたがいにより自己主張をおさえられ、自己の発達レディネスとちがった課題に取組まなければならぬからである。また社会性は与えられるものではなく、相互の自己主張の相剋の中から養われていくものである。この五・六歳の発達段階においては、自発性を尊重し、十分な自己主張のもとに、自己の能力のすべてをぶつけて作業するように指導したいものである。この自発性にもとづいた行為こそ創造的能力を養うものにはかならない。

ゾウの足がビッコに出来上がったとしても、そのことが問題なのではない。問題は、その共同作業の中で、一人一人の力がどれほど完全に出しきられているかということである。作品の評価は、個々の子どもの個性が、その作品の中に十分生かされているかということである。すなわち、制作の過程の子どもが大切なのであって、出来上がった作品が大切なのではない。子どもたちは、こうした遊びを通して自己主張し、

自発性は尊重され、(「受容されて」創造的能力が養われていくのである。同時にこの自己主張は、相互の葛藤を生み、その葛藤克服の努力から社会性を学んでいくのである。こうして独立した人格というものが形成されていくといえる。

③風に吹き飛ばされ、一大試練にたたされたが再建。ゾウ、くま、へびともそれぞれ完成まじか。「もう少しだよ」子どもたち、はりきる。何人かけがをしたが、保母の手あてを受けるのと、またすぐ遊び場へもどっていった。かけがでやる子は一人もいなかった。

④十二・一 ついにジャンゲル部落完成。ゾウ君誕生。このゾウのお腹の中にはこのグループのメンバーのみはいることが許されている。ほかのグループの子どもたちはとうとう入れてもらえなかった。著者も「入れてよ」とたのんでみたが「だめ！」といわれてしまった。ゾウのおなかの中にはいった子どもたちは、家の形態をとって、おとうさん、おかあさん、赤ちゃんをきめて遊んでいた。

⑤へびと沼だという。彼らは沼の中の大蛇にまたがって大喜びであった。へびはワラのたばで作られ、まさに大蛇といえるものであった。先の部分に赤い布がはさんであったので「何？」と聞くと、「舌じゅんか」と答えた。非常にこまかい神経をつかっているのである。日ごろの観察の鋭さ、そしてたく

みな表現であった。

また、ある子どもは、この大蛇は「空も飛べるんだ」と言っていた。

また、くまグループのくまの目はビールのせんで作られてあった。このようなことはだれも教えたことではなかった。

★以上、ガラクタ場を中心とした遊びの展開を考察してきたわけであるが、この遊びの成功の要因は、

第一は、なんといっても子ども自身のもつ自発性にもとづいた、すばらしい創造の力である。

第二は、時間と空間、すなわち豊かな自然の遊び場があったことである。

第三は、高度にトレーニングされた保育者が、いたことである。「ジャングル大帝」などの本を読んで、子どもたちの動機（モチベーション）を強化してやったり、材料、道具を用意し、また同時にけがの手あてなどに専念するなど、サイコドラマでいう補助自我の役をとってやったことである。

第四に、ガラクタ置場があり、材料が日ごろからたくわえられていたことである。

第五に、管理が十分なされた遊び場であること。特に、このように連続して日々遊びをつみかさねていく造形遊びでは、制

作物の保存がなされなければならず、管理された園独自の広い遊び場でなければ不可能である。以上の五点が指摘される。

三 小動物と保育

都市化の中で小動物たちは絶滅していく運命にあるのかもしれない。だが、ただ絶滅していくことを見守っていてよいのであろうか。自然のもっているすばらしい人間陶やの力を、みすみす失ってよいわけがない。ここでは、特に今日の課題として、保育における小動物の考え方を試み、自然をとりもどす保育の大切さを考えたい。

1 小動物の考え方

遊び場には、一見なんでもないようなものがある。それは草のしげみであり、土の小山や坂道である。しかしそれらが絶好の遊び場であることは、周知のとおりである。そこで草むらにひそむ小動物について注目してみよう。遊び場をより質的に豊かなものとして与えるために、不可欠な要素として小動物をとらえたい。

小川や水たまりは、水遊びやどろんこ遊びの場となるばかりではない。子どもたちはその中から、たちまちカエルやドジョウやアメンボをつかまえる。草むらの中からは、コメツキバツ

タやイナゴをつかまえるのである。これらの遊びは子どもたちに信じられないほど豊かな活動を要求する。忙しく動き回るとは、肉体のみならず、精神の働きをも活発にするのである。

トンボをつかまえようと、全神経を指先に集中して指を回しながらトンボに近づくと、ドジョウをとろうとして、全神経を足に集中しながら小川をさらう子、逃げられてしまった蝶のあとを追う子、こうした遊びの中で子どもたちのデリケートな精神は養われる。

子どもたちが生きものについて考え始める時、自らの生命についても考えはじめる時なのである。夢中でおいかつつかまえた大切な赤トンボが、虫かごの中で死んでしまった時、子どもたちは生命に限りあることを知るのである。生きとし生ける物には、生命のあることを知り、一たび死んだ物は二度と生きかえらない、自然の節理を知るのである。その時こそ人間の生命の尊さについても、実感をもって理解するのである。

2 犬と子どもたち

『アルダ(犬の名)』は、子どもたちにとって大切な仲間である。なぜなら、仲間はずれにされてしまった子どもが一人でめそめそしていても、その子の手をなめてなぐさめてくれる。その子のだれにも言えない心の悲しみを、静かに聞いてくれる。

たとえまちがった自己弁護の告白であっても、アルダは聞いてくれる。

こうした仲間から拒否されてしまった子どもであっても、アルダ(『小動物』)は迎えて(『受容』)してくれるのである。子どもは自分の気持をすっかり告げてしまうと、落着きをとれどして、ふたたび仲間のところへ帰っていきけるのである。

また、友だちからさらわれていた、攻撃性のあるT(五歳)は、アルダに対しても石をぶついたり、棒でたたいたりしたものである。だが訓練されたアルダはじっとこらえていた。やがて三カ月もすぎるところ、Tの攻撃する姿はほとんど見られなくなっていた。と同時にTは友だちの仲間に入れてもらえるようになっていったのである。相手が人間であったあいだは、Tがたたけば必ずたたきかえされたものである。だがアルダはじっとこらえていた。その対応のちがいが、Tの反省をうながし、性格をつくりかえたと考えられるのである。たたくことでTの気持は発散され、たたきかえされずにすんだことで気持は満たされ、こんどはアルダがかわいそうだと落着いて考えられるようになったのだと思われる。やがてTはほかの子がアルダをいじめているのを見ると「かわいそうじゃなか」とアルダに愛情を示しているのである。

もちろん小動物は遊びの主役になることはない。主役は子ど

ものであり、遊びは小動物に関係なくくりひろげられている。だが、その場面に小動物が現われたことで、子どもたちの遊びに与える影響はきわめて大きく、複雑なものである。アルダが来るのを見て、ママごとをしていた女の子は、童話の赤ずきんちゃんを思い出したのか、「オオカミが来たから大いそぎでお使いしてきたの」と仲間のおかあさんに報告していた。

ボール投げしていた男の子たちは、ボールをアルダにじゃれさせながら、とられまいと大さわぎであった。

時には「アルダのバカ、オタンチン」などと、通常許されないような罵倒の言葉もあびせられるのである。だがアルダならば寛大に聞き流してくれる。それは、小動物によって子どもたちの気持が自然のうちに支持され、受容されていることを示している。

アルダに子犬が生まれた時のことであるが、子どもたちの驚きと喜びは大きかった。アルダと仲よしだったSは、アルダにおやつをそっくりやってしまったほどである。また、どの子も子犬を抱きたがりとりっこであった。愛らしい子犬を見ておこり出した子どもは一人もいなかったし、いじめる子もいなかった。やわらかい毛ざわりと、暖かさを手に感じながら楽しみ、よちよち歩きを笑った。また「赤ちゃん」と呼んで自分たちの

遊びの中に位置づけていた。子犬がおしっこをすると「まあ、なぜ教えないの」「おべんじよって言うのよ」と懸命に教えていた。

このような遊びの中から子どもたちの情操は豊かに育てられるのである。

3 ヤギと子どもたち

野中保育園で飼っているヤギも、犬と同様非常に大きな価値がある。子どもたちは鳴き声をまねることが大好きであった。

どの子も例外なく「メー」と鳴いてみる。犬のように知恵はないが、乳を出してみせたり、背中に子どもをのせたりして、子どもを喜ばせる。すごい勢いで草を食べることは、子どもたちの食欲を増進させた。親ヤギと子ヤギのたわむれは、あきることなく子どもたちを楽しませる。こうした光景をながめることは、遊びつかれた子どもたちの絶好の休息である。遊び場にはこうした意味の休息の場もほしいものである。

4 カメさんごっこ

カメさんごっこは子どもたちの大好きな遊びである。二歳児クラスの保育一例であるが、園にいるカメさんを日ごろから見ているこの子どもたちは、自分たちの造形したこうらをつけて

もらうと、たちまち四つ足で歩き始める。また、首をひっこめる。子どもたちの一つ一つの動作の中から小動物の与えている力の大きさがうかがえるのである。

実際にカメラを見ている子と、見たことのない子では、遊びに打ち込む態度がまったくちがうのである。

5 カエルとり

野中保育園には、小川や池や小さな水路がある。そこには、カエル、どじょう、沢ガニ、いもり、げんごろう等の小動物がいる。いまカエルを例に考えてみよう。

雨ガエルといばガエルをT(四歳)、S(四歳)が小川のところでつかまえ、K(一歳十一カ月)に見せて得意の笑顔である。Kはプールの中で保母の背にとまった殿様ガエルをつかまえようと、指先に全神経を集中させて静かに近づく。そしてみごとに殿様ガエルをつかまえた。

こうした遊びは、自然の遊び場と、そこに小動物がいることによってはじめて可能なのである。前述のKは一歳十一カ月であるが、こうしたカエルをつかまえる遊びを通して、神経の集中、運動の敏捷性、成就の喜びを経験学習しているのである。

このことについて園長は「この自然の中には無数の宝物がかくされております。保育園が新緑に包まれるころ、子どもたちは

手のひらに毛虫をのせて、その美しさにみとれ、やがて毛虫のおしりをつついて競走させて遊ぶ。冬眠からさめたカエル、ヘビ、トカゲの寝床をさがしだすと、保育室の回りはそれを入れたバケツやあきカンでにぎわいます。新任の保母は悲鳴を上げるが、子どもたちは保母がなぜさわぐのかわからない。子どもたちは、大地の中で動くもの、生命のある生きもの、すべて身近な親近感を感じているのです。それがグロテスクだと感じるのは、おとなの既成の感覚なのでしょう。こうした自然の環境の中で育てられた子どもたちの精神は自由で、絵をかくのにも友だちのまねをしたりすることはほとんどありません」と述べている。

6 遊び場の仲間になったヘビ君

野中保育園においても、ヘビは特別のものであった。ヘビは化けるとか、ヘビに出会ったたりがある、などという迷信が伝わっていて、子どもの中には、恐怖のあまりヘビさえ見れば石や棒でたたき殺してしまう者がいた。逆に泣き出してしまう子もいた。

しかしこのことは、生きものを大切にしようという園の遊び場のビジョンに反することであった。それゆえ、園では遊びの指導としてヘビについて考えなければならなかった。そこでな

ぜヘビがこわいか子どもたちに聞いてみた。その理由は、①気持がわるい ②化ける ③たたりがある ④かむ ⑤まきつく等であった。

まず①の気持が悪いについては、カナダの心理学者ヘップの実験をもとに外林大作は次のように述べている。「過去の経験によってつくりあげられた大脳の過程と現在の過程との間に不一致がおきる。この不一致が恐怖をおこす。逃避するのは、この不一致をなくすためである」と、すなわち、こうした恐怖心は、なれることによって克服されることなのである。

つぎに、②③の「たたる」や「化ける」は科学的な根拠がないことである。結局、④⑤の「かむ」「まきつく」が問題となった。毒蛇であるなら、かまれたら大変である。そこでこの土地に長く住む農家のおじいさんを呼んできて、ヘビについての話をみんなで聞いた。その結果、この土地には毒蛇はいないことがわかった。種類は、

1 やまがし (最も多い) 2 青大将 (大きい) 3 しまヘビ (最も美しい) 4 地もぐり (小さい) 以上の四種であるということもわかった。

また人に害がないばかりか、野ねずみなどをとって食べるのでお百姓さんにとってはよい動物であることも知ることができたのである。



ヘビと遊ぶ一歳児

以上のことからヘビを殺す理由のないことがわかった。生きものを大切にしましょうというしながら、害もないヘビが今まで殺されていたのである。そしてあらためてヘビを見るとき、その美しさに強く感動したものである。

生きとし生ける物の生命を大切にしようという園の遊び場に対するビジョンは、こうしてヘビも遊び場の仲間にしていったのである。

年長組では、農家のおじいさんに教えてもらったとおり、ヘビの頭をおさえて、おっかなびっくり持ってみた。勇気を出して持ってみると「ヘビって意外にキレイなんだなあ」と感



へびをかわいがる子どもたち

心してしまった。一カ月もすぎたころ、すっかり子どもたちはへびになれ、上手に頭をつかんで持てるようになった。遊び場で出合ってももうこわくはない。仲よしの遊び友だちになったのである。こうして、いわれなき恐怖や殺害をくりかえすことはなくなったのである。自然の遊び場においては、このような指導が必要であることを、ここに明記しておく。

その後、子どもたちは、一層のびのびと、そして積極的に生活できるようになった。科学的な方法で恐怖をとりのぞいてやることは、子どもたちをいじけさせずに、のびのびと育てることになるのである。―おわり―
(静岡厚生保育専門学院)

注 参考資料

外林大作「心理学入門」 誠信書房

保育者の生きがい

堀 合 文 子



“生きがい”って何のことだろう。わかっていないように
わからない。率直に、平凡に考えれば“生きがい”だ。

“生きがい”——“生きがい”、たしかに毎日人間は生きて
いるし、生きているから活動している。が、その活動がは
たして世のため人のために何らかの役に立っているのか、
また、自分自身生きがいを感じて生活しているのか。ひし
ひしと生きがいを感じないだけ幸福なのか不幸なのか。
長い人生を本当に意義ある生活をし、自分もそれを自覚し
満足している人もいるだろう。その人はきっと幸福なのだ
ろう。“生きがい”——“生きがい”。生きがいは自分でつ
くるものなのか、自然とできてくるものなのか、人や社会
がつくってくれるものなのか。わからない。ともかくむず
かしい。

保育者の生きがいは……

世の中で、保育者という仕事は意義ある仕事ということ
は万人もみとめ、私もみとめるところだ。保育者というこ
とは教師だけに限らず、母親もその一員であることはいう
までもない。また対象の幼児もさまざまな幼児がいて、保
育者はそれぞれ与えられた天職としてそれぞれの道にはげ
んでいる。特殊幼児（身障者など）を指導しているので
“生きがい”を感じる、というわけでもなく、普通児、優
秀児の指導でも“生きがい”を感じる。

保育者が“生きがい”を感じる時、一般論でいうことは
やすく、かつ、一番保育者として大切なことで、これは他
の方も話してくださるだろうから、幼児がこのようなした

時、指導がこうであつた時が生きがいだ、などなど、私は省略する。

また幼児と保育者の日常は大へん忙しい。身体も精神もそして、日常生活の中に保育者の“生きがい”は終始あふれているはずだ。もちろん、その“生きがい”感は、ああ生きがいがあるというものでなく、むしろ感じない場合が多く、その中にひたきつてしまい、事態によっては悲観、困惑、悩みと“生きがい”感から脱してしまう場合がある。でもそれが人間の生きがいではないだろうか。起伏のある人生、それが人間の人生で、それだから人は生きがいを感じるのではないだろうか。保育者の生きがいもそこにあるのだろう。

保育者は自分がこのように生きがいを感じたとしても、はたして幼児に生きがいを与えているだろうか。

幼児の生きがいは……

いうまでもなく幼児の生活はあそびの生活である。幼児はそのあそびの生活を充分に活動し、味わうその中で学ぶ時に幼児は喜びを感じ、生きがいを感じている。

幼児のそのあそびの生活を、おとなの教師が、教師の教育的意図とか、研究の結果とかをふりかざして、無抵抗な

幼児、従順な幼児を教師の考えにのせ、幼児の生きがいを阻止してゐるのではないだろうか。教師は自分の計画なり方針の満足感から、幼児の生きがいをつぶして、教師自身の生きがいをそこに見いだしているのではないだろうか。

また幼児期は大切と、文字だのおけいこだのと極端な指導も、幼児は赤旗一つふらずに従順に教師についてゆくかのようにみえる。幼児はそれでも生きがいをどこかに見いだそうと努力し、与えられた課題を幼児なりにたのしくうれしそうに生活すると、教師やおとなは、あの中でも幼児はたのしそうだ、生きがいをもっていると、勝手な解釈をしている。赤旗のふれない幼児は、顔色や暴力、性格へとその抵抗はのび、本当の優秀児や有望児として育つ幼児が、教師の意にそわないため、ついに“問題児”とのレッテルをはられてしまう。

また「幼児は自由にあそばせてこそ」と、自由にあそばせることは理解した教師も、“よくあそんでいる、よくあそんでいる”といって、教師は傍観者で、または自由だけしかない生活をよしとして、現在の幼児の生きがいはあつてもその生きがいは一瞬一瞬消えてゆく生きがいで、将来、生きがいをもって生活する人には成長しない生きがいである。

グロースやホイジンガのいうように、無償の遊戯的活動こそ文化的活動の芽ばえる母胎と考えられる。とは神谷美恵子著『生きがいについて』の一節であるが、岡潔の偉大なる数学者も、少年時代蝶々とりや箱庭あそびで経験した喜びを、のちに数学という高度の知的活動のなかに見いだした」とつけ加えられている。

幼児の生きがいをつくることこそ、保育者の生きがいであり、保育者の使命ではなからうか。時代は移る、社会は変わる。環境もかわる。その中で育つ幼児も変わる。そして幼児は、一〇〇人いれば一〇〇人みなちがう。一時に、全員に、同じ事項で、なんで幼児一人一人に生きがい感をもたせることができるだろうか。

保育者は、一秒一秒、その幼児一人一人について生きがいのある生活をさせるために、頭を働かせ、考え、判断し、行動しなければならぬ。保育者は常に教育を創造していかねばならない。

これが、幼児教育における保育者の生きがいではないだろうか。もちろん、幼児も生きがいを感じて幼児期の生活を満喫するだろう。

私の生きがい

私もはずかしながら保育者の末席をけがしている。この課題をいただいた時に、私は生きがいを感じて生活しているかしら、生きがいを感じたかしら、とはたと、疑問をもった。

私も大正生まれの人間なので、ただ夢中ですごし、私に与えられた天職と思って、幼児の前に出れば使命感を感じ、夢中の一語で過ぎてきた。おそらく保育者の方はみな、幼児教育がやりたい、すきだという発端から発し、おそらく一つ一つに生きがいを感じていられる方が多いであろう。たまたま、私の発端はなさけなかなそのようなものではない。私（大正生まれ）の成長期は、旧式と名のつく家庭にあって、女が学問をする和高慢になる」と大反対をうけ、また女のはいる大学もない時代。こんな環境に反発して、女学校を出ると、どうしても勉強がしたくて最低短い期間の学校生活をやっと許されたのが今日の運命。喜びをもったというよりその喜びは学問ができるという喜びだった。そんなこんなで運命は幼児教育に私をのせた。こんな私なので生きがいは保育者というより、勉強することで、頭の中でいろいろ考える時私は一番たのしい。

幼児教育者は、心理学者、哲学者、科学者、数学者、文学者、またピアニスト、声楽家、舞踊家、画家などの芸術

家、そして医学の心得もち、以上のような素養と学問をもっていることが理想だと私は信念をもっているので、できないながらそこに到達しようと努めている。自分より遠い理想だが、それにむかつて毎日を過ごすことが私にとつて大へんたのしく希望がわく。これが私の生きがいなのだろうか。他の保育者とは発端がちがい、幼児と接している時、または接したことによる生きがい感はないので、時おり静かに考える時、私は幼児に申しわけなく、幼児にとつて偽善者的教育者だと考えてしまう。夢中の一語の中に幼児と生活し、こんな私が、幼児の教育をしてよいのか、恥ずかしいと共に幼児に申しわけない。

現在ささやかながらはげんでいることは、私にとってはささやかな“生きがい”だが、それがある程度実った時に、私は保育者としての生きがいをはじめて感じるのではないだろうか。

一生かかって私は保育者の生きがいを私なりに感じるこ
とができるかどうか。今は私の小さな小さな“生きがい”
の中に生きている。この小さな“生きがい”が実って保育
者の生きがいになるには私の人生はたりない。これらの学
問と素養は、保育者が勉強し、身につけても幼児の前にそ
のまま出すのではない。学問をしたから、勉強をしたから

というえらい保育者ではない。これだけの勉強をしていれ
ば幼児の前にそのまま出すことはほとんどなく、その人か
らにじみ出るその力、にじみ出る能力になるだろう。幼児
の前にはみる目もたのしそうな、そして幼児にとってよき
友、よき母、よき姉、よき兄、よき師であり、そして指導
にあたっては、その必要に応じてそのつど考えていく脳の
力。立派な高度な学問をもつていてもその力をふりかざす
のでなく、もっていることが身からにじみでるいうにいわ
れぬよい幼児教育をする、こんな保育者になれた時、私は
幼児教育に本当の“生きがい”を感じるだろう。

今は、自分で学び、考え、小さな生きがいの中で生活し
ている。大きな生きがいを前において。幼児に本当に申し
わけない。少しなりともそれが実現した時に、私は人なみ
の幼児教育に生きがいを感じる保育者になれるだろう。時
おり、私はすまして幼児の前にでている自分なさけなく、
幼児に心の中でわびている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

私の保育

何もかもが新しいできごとだった二年間が過ぎ、現在、私にとって二回目の四歳児三十人と毎日毎日遊び、走りまわっている。

この二年間、日に日に伸びている子どもたちに驚き、何とかその発達に追いついていこうと努力し、また子どもが子ども自身にもわからない何かを求めているとき、それがわからずに「どうしよう、どうしよう。何をしたらいいのかしら」と困ったり、子どもが私の話し方とそっくりに話をしているとうれしいような、半分恥ずかしいような妙な気持ちになったり、時に、私の生活態度自体「これでいいのかしら」と考え直させられたり……

……と、毎日を夢中に生活してきた。

この四月からは、二年間の反省をよく生かして保育をしようと、「子どもをよくみることを目標に六月まで過ごしてきた。

平野信子



子どもたちは、ひとりひとりふしぎなくらいに違っていることにあらためて感心してしまった。「きょうは子どもとよく遊べたかしら」「○○ちゃんに対しての働きかけは、あれでよかったのかしら」と毎日、わからないことの連続であった。おまけに、六月になってから、子どもをほんとうには見ていなかったこと、子どもに大きな合図を送ってもらうまで、そのことに気づかなかったこと、など保育の大事なところを落としていたことがわかり、あせったり、困ったりしている。それで、四月から六月までの日々の記録をもとに、子どもと私との関係（つながり）について考え、反省してみたいと思う。

入園式で泣いていたＹ（男児に）ついて

四月十二日（一日目）

廊下で子どもたちを迎えていると、玄関からO先生にかえられたYが泣きながら来る。大泣きをしているYを受けとり、抱きながら他の子どもたちを迎え入れる。しばらくすると、泣いているYを見て、Sも泣き始める。Y、Sの二人をかかえていると、O先生が

「たいへんでしょ」

「Yちゃん、お花に水をやるの、お手伝いしてくださいな」といってYをつれていってくださる。しばらくして、Yはさっぱりした顔をして帰ってくる。(花に水をやるのを見ていたとのこと)へやにはいるが、すみのいすにすわりほかの子どもが遊ぶのを見ている。何回か遊びに誘うが「いや〜ん」と半泣きの声を出してすわっている。すみからすみへと、時々移っていたようである。

四月十三日(二日目)

——昨日の状態から、母親にしばらくいてももらったほうがよいと考えた——

玄関で待っている。Yがぐずぐずいい出したので、「Yちゃん、おかあさんにYちゃんのおへやを見てもらいましょうね。『スリッパここよ』って、おかあさんに教えてあげて」と話しかけ、母親に戸口の側のいすにしばらくの間、すわってもらう。

Yは母親にくっついていてたが、しばらくするとレール・セツトを出してきて、レールを敷き、電車を走らせて遊び始める。様子をみてから、「おかあさん、今度は家で待っていてくださいね」と帰ってもらう。「ママのところ〜」と泣き始めるので、

ママは家でYを待っていること、

必ず迎えにくてくれること、を話す。

Yを抱いていると、「どうしたの?」「この子泣いているよ」と子どもたちが寄ってくる。

YにつられてベソをかいたK。一生懸命にYの頭をなでているM、母親と離れることが不安で、家にあるのと同じレゴで遊ぶのが精一杯のSが黙ってYにレゴをさし出している。……子どもたちがそれぞれにからだ全体を使ってYのことを気づかっている。——以前は、子どもが泣くと私自身どうしてよいかわからずに、いっしょに泣きたいような気持になったが、Yは泣きたいだけ泣いていいのだ。と考えると、落ちついていることができた。——そのうちに泣き声が次第に弱まり、すわり心地が悪いか、ひざの上でもそもそ動き始めた。——やっと動いてくれた。今度は、いつひざからおろしたらよいのだろうか——と考えながら抱いている。

Yはほかの子どもが遊んでいる様子を見ているようである。

そこへボールを持ったM子がきて私の手にさわりながら「この子、赤ちゃん？」と聞く。「どうして？ Yちゃんは四歳のおにいさんよ。赤ちゃんじゃないのよ。ちょっと泣きたかったけど、もうだいじょうぶ」とひざからおろすと、Yは立った。

四月十四日

子どもたちを迎えようと玄関へ行くと、Yが泣いている。私の顔を見ると、母親は「お願いします」と足早に帰る。——私の予定としては、きょうも少しの間保育室にいてほしいと思っていた——

「ママのところへいくう」と泣くが、泣き方が、昨日よりも弱い。しばらくすると泣きやみ、へやのすみにへばりついてはかの子どもたちの遊んでいる様子をみている。

回転すべり台へ行こう、と誘うと、「いや」とかぶりをふるが、みんなと少し離れてぶらぶらしながらついてくる。すべり台で、手で、トンネル、ふみきりを作って遊んでいるうちに、Yのことをポツと忘れてしまっていた。

後ろから、トンと誰かが私の背中をたたいた。「え？」とふり返るが、どの子どもがたたいたのかわからない。また遊んでいると、さっきよりも少し強くドン、ふり返るとYが立っていた。「合図していたのYちゃん？」ときくと、口が少し笑う。

「Yちゃんもすべり台いっしょにすべりましょうか」と誘うと、「いいん」とおこったように言い、身を後ろに引く。

次第に強くドン、ドンとたたき、それに対する私の反応（「あれ？」とふり返ってYを見る）をくりかえし楽しんでた。

——少しずつ楽しさが心の中にはいつてくるようである——

四日目から、Yは泣かずにひとりでくることができるようになった。

幼稚園にはいることに抵抗を示したYも、このようにしてはいることができるようになり、日を追って落ちついていった。

保育室、屋上、砂場などの遊び場が分かれている私の幼稚園では、遊びから遊びへ移るとき、ほかの園よりも大急ぎで走らねばならない。そのため、しばらくの間私にくっついていたSから「先生、そんなに走ると、ばくたびれちゃうよ」と言われてしまったが、朝、それぞれの子どもの特有のしかたで受け入れ（あいさつ）をしておくと、安心して一日の遊びを始めることができるようになった。

私は、遊べない子どもといっしょに遊ぶことに全力を注いだ。ままごとで、十人以上の子どもにパンをトースターで焼き、バターをぬり、ジャムをつけて食べさせたり（からっぽの手でまねを）砂場で子どもといっしょに山をつくり、高速道路をつくり、……楽しくなり、保育者であることをすっかり忘れてし

まい、思い出してハッとしたり……。

家で取れたボタンを「平野先生につけてもらうんだ」と手に持って登園した子ども。（幼稚園でとれたボタンは、いつもつけている）……「ママ、お迎え遅く来て、（先生と）長いこと手をつないでいられるから……」と頼んだ子ども。そして五日になって、おべんとうを食べたあと、「ねえ、おかあさん……」と私に話しかけた子ども。——やっと、おかあさんって間違えてくれた。とうれしくなっていました——

このようにして私と子どもとのつながりも一応でき、友だち関係もひろがりだしたので、これからが堀合先生がいつも言っておられる「遊びの中にはいつて、ひとりひとりをのばしていく」時期なのだと考え、子どものアイデアのふくらませ方、材料の出し方、などを考え始めていた。

子どもたちは、遊びを見つけ、それぞれに楽しんでいるように見えたのだが——。

六月十八日

子どもを迎えていると、Sがほかの子どもの母親につれてこられる。どうしたのかと見ると、顔の表情がいつになく固い。「おはよう」とあいさつをしても何も言わずに、からだを固くする。「どうしたの?」ときいてみると泣き始める。へやには

いったら、友だちもいるから落ちつくかしら、とはいろいろとすると、からだをキュッと固くし、その場にすわりこむ。

私もそこにすわりこみSを抱く。子どもたちが「先生、Sちゃんどうして泣いているの?」「どうしたの?」と心配そうにのぞきこんだり、頭をなでたりしてくれた。——Sをひざにのせたまま、保育室の中を見ると、今まで感じたことがないほどつまらないへやに見えてきた。子どもの背の高さになって物を見ることは、入園式の前にただけで、その後は忘れていたことを思い出す——

しばらくしてSは泣きやむ。Kがクレパスでかいた絵とハサミを持って、私たちがすわっている隣りにすわりこみ、絵を切りぬき始めた。切りくずをみていると、船の形をしているので、「あ、船みたいね」と言い、床板のすき間に立てる。「次は何かな」「あ、白鳥かな?」S「ちがうよ。あひるだよ」と初めて口をきく。「あ、そうね、ガーガーあひるさんね」手に持っていたそれをSにわたすと、受けとり、船の横に立てる。次にSは小さな紙切れを拾い、「おさかなさんだよ」「船に『こんにちは』しにきたのかな?」ほかの子どもたちも、何をしているのかとのぞきに來ては、おもいおもいにかいたものを持って遊びにはいつてくるので、にぎやかになってくる。——床板のすき間に立てて動かし、遊んでいる——

S「おさかなさん、目があつたほうがいいよ」私「じゃあ、書きにいきましょう」（立ちあがろうとする）S「いいよ、いいよ」少しして、「ぼく、書いてくるね」黒クレパスでうすく目をつけて戻ってくる。

S「木、つくってくるね」

私「おねがいますね。待ってるわ」

小さく切った紙を丸めてたみ、セロテープでつけ、その上から、きみどり色にぬってある木を持ち、「できたよ」とへやからでくる。——いつもの表情になっていたのでホッとする——

ままごとの子どもたちから「先生、ごちそう食べにきて〜え」と呼ばれたのを機に「ごちそう食べに行きますね」とその場から離れる。廊下での遊びも一段落し、Sは友だちといっしょにへやへはいってきて、マジックで絵を書き始める——。帰りには、ニコニコと「さよなら」を言ってくれた。

——Sは、からだ全体を使って遊んではいなかったが、小さくても自分で遊びを見つけて遊んでいる子どもであり、Sなりに楽しんでいる。と見ていたので驚いてしまった——

六月十九日

Sがどのような顔をして登園するか、私は重大なテストを受けるような気持で待っていた。Sは、かばんと帽子をつけたま

ま「おはよう」と走ってきてくれた。

——重かった心が、急に軽くなったように感じられた——

六月になり、子どもと私のつながりについて、「朝の受けいれをしっかりしておいたらよい」とすっかり安心してしまい、「遊びをどう伸ばすか」ということばかりに気をとられていたように思われる。

Sをほんとうによく見ていたら、へやへはいりたくなくなる前に、何か別の小さな合図を出しているのに気づいたのではないか。それに働きかけをしていたら悲しい思いをさせずにすんだのではないかと考える。

頭の中で考えると、子どもといっしょになって遊びを伸ばしていくことが即、子どもとのつながりを深めていくことなのに……。四月から今まで、一生懸命に子どもを見ていたはずなのに、何を見ていたのだろうか。

Sに大きな合図を出してもらって以来、ひとりひとりが力を存分に出し、満足感を得て、きっぱりとした顔つきで帰ることができているか、を考えて、子どもの目、表情、動き、を見ている。子どもをほんとうに見るのには、どんな心が必要なのだろうか、子どもの心を感じる心とは……。子どもたちから教えてもらえるように、からだ全体を使って考え、毎日の保育を大切にしていきたいと思う。

（千代田区立富士見幼稚園）

わが幼稚園

六月の、ある雨もよいの夜でした。訪れたお宅は、高台にあり、木々にかこまれた静かなたたずまいで、玄関にお出迎えてくださいましたのは、おだやかな風貌の特殊教育指導主事さまです。

その日の目的は、昨年幼稚園を修了して、小学校へ入学した自閉的傾向のある子どもが、最初の年はまことにうまくいったのに、今年の四月に担任の先生が変わったトタンに、しっけがなっていない。

幼稚園の先生も、一年生の先生も、いったいなにをやっていたのか。

河井多喜子



ほかの児童の迷惑になる、等々
さんさんの有様で、親も子どもどうしたらよいかわからないで、キィキィ言っているような状態なので、何とか、現在・将来を考慮し、その子どもにふさわしい道を見つけていただきたいということでした。

まず始めに、問題をもった子どもを受け入れるか、受け入れないかは校長の権限だ、とおっしゃいましたのは、どうも、お逃げになった感じでした。

母親が希望している、新しく開設される自閉症児の学級は、おそらく希望者が殺到し、詮衡がきびしくはないのでは

なかるうかとのこと、おだやかな口調で道の行く手をふさがれた感じがして、こちらは、だんだん頭にきてしまっています。

「ほかの父兄もうるさいし、校長は養護学級を考えているようです」とまことに冷静です。この世を、清く、正しく、美しく生きた方はかくもご立派です。

表もあれば、裏もある。人生の裏街道、そのまた奥の細みちを、手さぐりで裸、はだしで歩くわたしは、冷たさにも暖かさにもだらしがなくて、汗と涙と鼻水で、ぐしゃぐしゃになるのです。

二歳ごろに言葉を失ったまま、五歳の秋に幼稚園にはいつてきた彼が、一年余りで、日常語をある程度話せるようになったのは、普通児の集団にはいつていたからだと思うのです。指導主事をお訪ねした翌日、こどもの母親から電話がありました。母親の声がとぎれた時「幼稚園に行きたい」という声が受話機にはいつてきました。はつきりと。

はからずも障害児をお引受けして、普通児の中で保育するようになつて、三年余りになります。一カ年あるいは二カ年の幼稚園生活のあとに、学校へ進んだ子どももあり、新しくいつて来た子どももあります。

今年の四月に入園した障害児の中には、遠くばしり癖の子ど

もがいて、ちょっとしたとり物を演じる時があります。いつのまにかとび出して、駅を通り越し、海まで行つてしまつてごきげんなのです。三カ月たった現在では、原つぱ行き、うさぎのごちそう摘みなどコースがすむと落ちつきますし、お人形さんのようにかわいい顔をして、うさぎのように無言で無表情だった子どもも、ポケットから紙を出して鼻をふいてという動作をして、顔を見てくれるようになりましたし、「おんぶ」らしき言葉を言つて背中を求めるようになりました。何でも自分の思う通りにならないと泣き叫んで、じれていた子どもも、お帰りには、ひざにのつて話を聞いたりするようになりました。

普通児はどうでしょうか、みんな自分たちの仲間という気持ちです。正義の味方もいれば、母性愛型もいます。知らず知らずのうちに思いやりの心も養われますし、色々な場合に処するすべもわかり、お互いに助け合つて仲よく暮している毎日です。

ここの幼稚園では毎年バザーを開きます。それで得た利益金は、母と子どものために、有意義に使用されるのです。その努力の結晶の尊さは、金額の多いことではなくて、協力・奉仕の気持が生きているところにあるのです。自分が一生懸命に作つたものに、低い値をつけられたと不満をのべる方もないわけではなく、自分はこれだけ骨を折つて、こんなに役に立つて、と

発表なさる方の中にはあります。先生は何をボヤボヤしているのでしょうかというわけです。それほどまでの全面的協力を深く感謝しています。そのうちに、だんだん話がそれて、自分の子どもは何も問題をもってはいない、自閉症児といっしょにされたら、先生の目は全体にはとどかないであろうし、伸びる芽も伸ばしてもらえなくなるのではないでしょうか、と一人が言い出すと、ああそうかとあやうく傾きそうになる方が出てきたりします。

中には、皆の話の時は言い出しそびれたのでしょうか。次の日になって「先生、うちの子が普通児で心配のない子と思っているわけではないのですけれども、障害をもったお子さんの治療に、少しでもお役に立てば本当にありがたく幸せだと思います」とこっそり話して下さる方もあるのです。うれしくて胸がいっぱいになってしまいます。

母親たちは古切手集めもしています。ネパールの子どもを結核から守ろうと身をささげていらっしやる岩村博士に、ささやかな心をお届けするのです。沖繩の問題・ベトナムのこと・イタイタイ病などのことについても、その心を知る努力が続けている母親たちもいることを心から喜び、わたくしもあとに続きます。

ここは、山に囲まれて、桜や松や杉などのみどりで区切られた青い空を見上げる、小さな谷間の、小さな幼稚園です。心をやわらかい子どもが集まって来ます。あひるも仲間入り、いっしょに走ったり、子どもがのったりして遊びます。しらこばとも美しい姿をしています。かわいい声でなきます。

白いうさぎと黒いうさぎが仲よくごちそうを食べています。これが決定版なのです。しろとくろは、こどもたちと遊んでとても楽しいのです。ひなぎくとびや、クローバーくぐりはしませんけれど、あじさいの陰にかくれたり、れんぎょうの横をすりぬけたり、だっこされたり、沈丁花の下にもぐり込んだりします。

こどもたちは、白いうさぎと黒いうさぎの絵本を見ると、幼稚園のうさぎとおなじだねと言つてよろこびます。また、子どもたちはうさぎにごちそうをあげるのが楽しみです。裏山の方へくずの葉などをさがしに行きます。ついでに真赤なヘビイチゴも、お砂のケーキのデコレーション用に摘んだりします。

動植物や砂などとながりが出来ると、自閉的傾向も徐々にうすらいで、お友だちとの結びつきも出来、ことばも出てくるようになるのが今までの経験でございます。楽しみです。元気な子どもたちは一層すばらしいのです。汗で前髪が額にくっ

つき、ドロのつけばくろも、ガウンも手も泥だらけです。澄んだ目は何をか語り、口をとがらして、全身で躍動するいのちの言葉を聞かせてくれます。わたしも彼らに負けないくらい汗を流して今日の幸せの仲間に入れてもらいましょう。

「先生、先生、けんちゃんがお友だちの名前を呼んで追いかけていますよ」

かわいいといつては、お友だちの髪の毛を引っばったり、顔や手をつねったりして、人とのつながりがうまくつかなかった子どものことを、目をかがやかせて伝えてくれる若い先生、そこには、自分の心も、子どもの心も、いとおしみ育てる美しいいのちが生きている。静かなえみにあふれるよろこびがある。

「勇ちゃんがおぞうきんを持って来て、お掃除をしているんです」（言葉がない、ハダシの王子さま）

「あきらくんが、せんせいって言ってくれたんです」（言語障害児）など

先生も子どもも大喜びで報告です。言葉を失った子どもが、いつのまにか少しづつ話してくれるようになる楽しみは、言い表わすことが出来ないほどです。

お願いを聞いてください。

障害児を預ってあげてください。

言葉はなくても、大ぜいの仲間は欲しいのです。最初は、全然別行動でも、本人は楽しいし、だんだんみんなといっしょに話を聞く楽しみも、何かする楽しみもわかってくるようです。

この園の場合、自閉的傾向、知恵おくれ・言語障害・脳性小児マヒの子どもたちとの小さな小さな経験で、大きなことを申し上げてまことに恥ずかしいことですけれど。

今から思いますと、貴族の幼児教育を学び、それらしきことをしてふしぎを感じなかったころから進歩したのか、墮落したのか。

今日を生きる

知恵も力も足りないけれど、あの子に差しのべてあげたい両手がある。ひざがある。背中もあるし胸もある。なんとうれしいことでしょう。（陰の声あり、おこりんぼ先生、何を言っている。ハイ、申しわけありません。自分の心に言い聞かせているのです）

笑ったり、おこったり、時には親切に、時には不親切に心のきずなを、きゅっと結んで

時々、自分の心をむき出しにしてみます。あの人は、自分

の意見と違ひ、いつも反対ばかりするからきらい
お金持はきらい。何だか人を見下げるような感じがするから

大きな顔をする人はきらい

そして、自分の好きなことだけしたい

らくをしたいし、家族に少し長びくような病人があつたり
すると、神様は不公平だ、など文句たらたら、忙しくつて
山へも行けやしないとか

これが本心なのです

反対に自分が迷惑をかけているのをたなにあげて
こんなにだめな、自分の力など頼みにならないことを知り
ました

子どもの集まるところに、ふしぎな力があふれます。大きな
力を知りました

助け合つて仲よく暮しなさい、との言葉や、愛と英知と創造
が生きがいであると教えてくださった方の心をかみしめて
います

人の集まるところには、必ず、その心が生きていて、わたくし
はその大きな力を頼みとして、それにひたり、それを受け
て、きょうの一日を生きています。

山がけむる、つゆぞら、雨もまた楽しい心境です

歩きなれたくねくね道

見なれたまわりの山

そこに、わたしがいる

萩のたれた道を歩くわたしは、明日はいないかもしれない
い

だから、きょうが美しくうれしいのです

人の心の暖かさを思い、山や川や海を美しいと眺め、自分
が幼児の時に握つてくださった先生の、あの手のぬくみを、
子どもに伝えることが出来るように祈りつつ送る日々
なのです

(鎌倉聖路加幼稚園)

ユートピア

三歳児のかわいいことば



村 石 京 子

三歳児の生活は、人数も少人数で教師との関係も密接であることから、ひとりひとりの興味や話題が教師に向かつて投げかけられることが比較的多い。いつもなにげなく聞いてそれにうけ答えしてしまうことが多いが、あんまりかわいいのでそれを記録しておいた中から幾つかひろってみることにする。

三歳児はまだたどたどしくはあるけれど、一応自分たちの生活の中で、自分の使うことばをもって自分の意志や興味を相手に伝えるという機能が果たせる段階に成長して、幼稚園に臨んでいる。そして彼らのことばの中には、三歳児らしい独特の解釈もあったり、あるいは親からいわれたことそのままの伝達もあったり、随分古めかしいことばも時折聞かれたり、またそれとは逆に世の中で最近使われだしているもの

がはいってきたりしている。ちよつとした話題の中にも、世相の反映ともいえるようなものもみられるし、あるいは親の生活態度の現われ「親は子ども鏡」ということもみられたりする場合もあっておもしろい。

◆鳥のなまえ

保育室の中に初めて鳥かごをもってきた日のこと

Y夫「これ、どうしたの？」

T「あのね、きょうからおへやに遊びにきたのよ」

Y夫「なんて名前？」

T「これは、きんかちょうよ。でも、何かいい名前を考えてつけてあげてね」

ここで私は、ピー子とかチュン子とかいう月並なことばがかえってくると

予想していたのだが……。

Y 夫「それじゃ、カラスにしようよ。」

カラス！

T 「？！」

その会話を聞いていたN夫、ちょうど庭でにわとりがないたのを聞いて、

ハッと気づいたらしく、

N 夫「あのね、にわとりがいい、ニ

ワトリ！」

T 「？？」

N 夫とY 夫は、それぞれ鳥かごの中のきんかちょう向かって

Y 夫「カラス、カラス」

N 夫「ニワトリ！」

◆オヤフコウ

I 夫の指にささくれができています。

それを私に見せながら、

I 夫「ねえ、先生、これしたいのよ。」

何だか」

T 「あら、どうしたのかしらね」

I 夫「あのね、これはね、オヤフコ

ウなのよ」

T 「え、どういうこと？」

びっくりして聞く私に、N 夫はすまして答えた。

I 夫「あのね、オヤフコウってご飯を食べないっていうことよ」

I 夫は、幼稚園のおべんとうのとき

も途中で席をたって遊び出し、終わ

りまで食事をすませることが少なかった。

家でも同様なのであろう。そのことを

気にしている母親（あるいは祖母？）

の口から出たことばをうけついで説明

してくれたものと解釈される。

◆現代語 二つ

① ある日、帰りの時間をまちがえたのかA子の母が迎えにくるのが大へんおそく三十分も待っていた。しんと

してしまった幼稚園、心細げなA子の表情を見て私はなぐさめ顔でいった。

T 「どうしたのかしら、A子ちゃん

んのママおそいわね」

A 子「Aちゃんのママ、おそいわね」

T 「あのね、きつと今いそいでお

迎えに来てくださるところよ。

だから、もうちょっと待ってて

ね」

A 子「Aちゃんのママ、今きつとあ

せつてるよ」

② いつもは比較のおとなしいM子

が、きょうは氣にいった遊びが見つ

られて、へやの中でうれしそうに大き

な声を出して元気に遊んでいる。その

ようすを見ていたらしく、K子が突然

私に向かって言った。

K 子「ねえ、先生、M子ちゃん

のつて

◆ ママのいったこと

昼食の時間に、家の兄弟のことが話題になる。もっぱら、強いとか、何ができるとかいった話題の中で、

U子「私のお兄ちゃまね、前はとってもやさしくって何でもしてくれただけど、このごろあんまりしてくれないの。だんだん、悪くなるんだって、おかしいでしょ、先生」

おかあさま、あんまりほかの兄弟のいるところで批評しない方がよいようですね。

◆ 製作の中に見られる一つの着想

H夫が新聞をつくって、ままごの家にとどけるといふ。画用紙にマジックで何か×とか○とかいっばい書いて、ところどころに写真と称して絵もかき入れた。その紙を四つ折にして新

聞ができ上がった。

H夫「新聞できたよ、先生」

T「見せて」

H夫「ハイ、これ」

T「あら、すてき。いいのができたわね」

H夫「新聞できたよ。(ままごとをしている人たちに向かって)今もっていきますからね」と立ちかけて、

H夫「あつ、あれ、あれ、あれ入れなくちゃ。ほら、買物の何円ですって書いてあるのをつくるのわすれちゃた。先生、色の紙かしてね、あれ書くね。あの、卵いくらです。トマトいくらですっていうのつくるから……」

彼にとって新聞を届けるときには、別刷の商店の広告も折り込んでなければ、新聞としては不完全なものだった

らしい。

◆ 幼児にも幼児文学者と同じ

表現が――

保育室で鈴虫を飼っている。朝、なすやきゅうりを時々とりかえているので、早く登園した子どもはそれを見ていることもある。きょうはきゅうりをあげようと思つて持ってきた。そのきゅうりをじつと見ていたS子は、

S子「あ、先生、きゅうりさん、水ぼうそうよ」

T「あら、ほんとねー」

S子「かわいそ、きゅうりさん。おくすりつけてあげてね」

S子は二ヵ月ほど前に水ぼうそうになった。その体験からきゅうりのぽつぽつを水ぼうそうと言ったのだが、これとまったく同じ表現が、松谷みよ子さんの「ちいさいもちゃん」の中に

ある。ももちやんが水痘になったあとで、きゅうりを水ぼうそうといつて、おくすりをつけてあげるといふのである。何だか、とても楽しい朝であつた。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

コロンビア大学のケネス・ワン教授によれば、言語理解（言語保育）の概念として次のようにあげてある。

（「幼児の知育」 上野辰美訳 明治図書）

- 1 シンボル・システムとしてのことば ことばと表示
- 2 アルファベットと文法 発音
 ・シンボル・文法・構造
- 3 共通の一致としての意味 意味・語
- 4 コミュニケーションとしてのことば 社会的機能

今まであげたいくつかの事例も、あ

る場合は3の範疇にはいたり、4の役割を果たしたりしていると解される。

一つの語でも世間一般で通用しているのと同じ意味でとらえている場合もあるし、幼児なりの独自の解釈をもっている場合もある。幼児との会話はいつもは気づかずに過ぎてしまう場合もあるが、その場面場面であらえてみると、寶石のような美しい表現があつたり、あるいはいみじくも事実を的確にうけとめていることばが発せられたりしている。また新しいことばも時代にのってどんどんと子どもの中にはいつてきているのわかる。三歳児は、言語機能の著しく伸びる時期であるので、ことにおもしろい。

そして三歳児のことばの収得源というものは、今までは親や兄弟であつたり、友だちであつたりテレビであつたり

することが多いであろうが、これからは、その中に教師というものも大きな影響を与えていくことになる。美しい日本語は美しい心につながり、よい品格をつちかていくものとなる。ことばというものは教えるものではなくて、子どもの育つ環境の中で自然におぼえていくものであるから、子どもは子どもによい影響を与えるようなことばを使い、楽しい会話を続けたいとまたあらためて感ずるのであつた。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

ある声楽家のため息

— 音大生の現状から
その幼児期を考える —



小 野 邦 代

◆音に無関心な音大生

音楽大学にはいつてくる人たちが、私のように音に興味をもっている人ばかりじゃないということに、やっとこのごろ気がついてきました。バカのあと知恵というんでしょうか。最初は、自分と同じにものすごく音が好きで、歌がうまくなりたいいんでこの学校にきたんだ、と信じていたわけです。

ある日一人の学生から「適当にやっていただくだけでけっこうです」といわれたんです。もう、がく然どころじゃなくて、大地震にあったような気がしました。私は、もちろん自分だって完璧な演奏なんてやったこともないし、でもしれないけど、とにかく音が好きで、美しさ、楽しさ、というものを自分で勉

強していきたい、という気持ちがあります。この人のもっている五なら五の能力の範囲で、絶対に五までもっていききたいと、こっちは思っているわけなんです。でも本人にとっては、それが迷惑なんですよ。こっちがいいと考えていることを、必ず向こうもいいと考えてはくれない。こういうことをやると勉強しただけです。

曲をあげることには興味があつて、何曲あがつたら先生になれるのかなどと、どうしようもない人が本場に多いです。何曲やった、なんていうのは、その人の音楽的なものとは関係がないんです。どのくらいその曲を深く考え、どのくらいきれいな音を出し、どのくらい深く感じたかということの方が問題だと

思うし、なにも何十曲やり、十何年ピアノをひいたって、全然音楽になっていない人だっているわけです。

先生から与えられたものの、親からこうしなさいと言われたもののしかしようとしないうですね。だから発展がないんです。これは恐いことだと思います。

レッスンをしていて、まえに同じ曲ではかの人が注意された、その同じところを注意されるんですね。人のことに非常に無関心なんです。音楽を勉強するいじょう、どんな音にだって関心をもたなくちゃいけないのに、それをもっていないんです。そのうえ、となりでとんでもない変な音を出していても平気で歌っている、というのも無神経すぎます。

音楽をやりたいからではなくて、音楽大学を卒業したいからだけのような人、親孝行のために学校に入ったのがあります。こういう人には、少なくとも音楽をやってもらいたくないと思います。なんのためにこんなに音楽人口がふえているか、非常に疑問ですけど、そのうちにおそらくこういうのはすたっていくと思います。私なんか、毎日毎日どうにもならない音楽家をつくっているわけですが、月給どろぼうじゃないかと思うこともあります。けれども需要があるいじょうは、わりきって、この部分はそうじゃない、ほかの部分は税金のため、というよう

に向こうが要求しているだけのことをこつちもやればいいと考えるようになりましたけど……。

◆音楽バカ

ことしも入試で、歌もピアノも一番の人が、語学が非常に悪くてだめでした。平均して何もかもよくできるというのは、ある程度音楽家には不向きなんです。やっぱり集中して何かをやる、というのが伸びると思うんですが、世間がそういうものを認めなくなってきたているし……。だから私も近ごろは、学科の成績をさきに見るんです。既成品を作るようでないやなんですけど、学校がうけ入れてくれないいじょう、しかたないですよ。だんだんと「音楽バカ」のようなのがなくなってきました。私も、たくさん、何億、というようなお金があったら、ぜったいに「音楽大学」じゃなくて「音楽専門学校」を作りたいなんて、思いますけれどね。何もかもよくできるというのは、人間にとって不可能だと思いますしね。「いやいやじゃない音楽」ばかり聞かせられる学校ができないかしら、なんて考えてます。

◆幼児教育科はやさしい

私もよくないんです。本人と親の希望で、とにかく音楽大学へ入れたいというので結局入れてしまうのがよくないんです。幼児教育科に入学した人の中で、本当に幼児教育に興味をもつ

できたというのは、もう十人もいないと思います。あとはまだ自分が音楽的に劣っているから、幼児教育科なら通る、教育科には通らないというカスをひきうけるわけなんです。

幼児教育科の人たちは、私は声が悪いから勉強をしてもダメだというふうに、最初から決めてしまっているんだけれども、いい声でも雑音があるわけです。全然音楽にならない音、動かない音、音楽というのは、常に流れていなきやだめですし、動かないと結局雑音になってくると私は思うんです。いい声にもかかわらず音楽になっていない音、それから、変な声にもかかわらずいい音楽になっている音というのがあるわけです。

たとえば、ルイ・アームストロングだって、マヘリア・ジャクソンだってそうです。楽しい音楽ですからね、あれは。そういう歌の心というものの、人の心におちこむ、子どもの心をとらえるというように、何か音楽になっていればいいと思うんです。音楽はまず、楽しいものだということを子どもにうえつけるためには、そんなに上手に歌う必要もないし、いっしょに何かしてくれる、という意識が、子どもには一番大事なんじゃないかなと思います。

教育科の卒業生が手紙をよこしまして、

——自分が歌わなかったということが、どのくらい子どもに對

して影響力がないかということが身にしみてわかりました。私はある程度ピアノは得意でしたが、ピアノの名演奏をして、子どもはピアノの回りでグルグル回っているだけなので——

というんです。グルグル回って、どうしてあんなに指が速く動くんだろうぐらいの興味しか示さないと。だけど、そこでちょっと変な声でも歌ってやると狂喜して喜ぶ、というんです。要するにそれは心の問題だと思うんです。その先生が、子どもといっしょに音に興味をもって何かしてやれば、もうすでにそれがにじみ出てくると思うし、子どもはすごく敏感ですからそれを感じると思います。

◆「過保護」という残酷物語

親の過保護という問題も大きいと思いますね。その子の素質自体は、もつとすばらしいものだったと思うんです。親がまわりで余計なことをベチャクチャ言うから、頭の方が働かなくなっただけです。そうすると、「この子は何もできないから、私がいなければどうにもならない」と思ったりして、悪循環であいうふうになっちゃったと思います。

おかあさんが自分の子どもに向かって、「音楽が好きなんです、ほんと、ネッ、ネッ」と言われるのを聞いていると、かわいそ

うで涙がこぼれそうになります。あれで子ども自身が、やりた
い」と思ったことが何%あったらうか。親が「あなた、した
いわよね」とおしつけて、子どもが「そうだ」とだんだん思う
ようになったのではないか……と思うんです。

手のかかりすぎた子は、絶対に伸びません。素質もすばらし
いし、お金もふんだんにあり、時間もあり、家まで建ててもら
っても、過保護というのは伸びないんです。私が、本人に音楽
的な質問をしても、全部親が返事をなさるんです。そして、「う
ちの子は無口でして」とおっしゃる。無口じゃなくて、おかあ
さんが子どもが言うまにに全部おっしゃるから、子どもはボワ
ッとしてるんですね。あれはもう、残酷物語です。

それから、失望ばかりしているんじゃないかって、いつもニコニ
コしているような人、これはやっぱり伸びます。根性もついで
に育っていますしね。親が、「自分はこれだけできたんだから、
あなたも同じようにできなきゃだめよ」みたいなことをうっか
り言っていただと困ります。とにかく、失望がはね返らない
ような育て方、これは何も音楽教育だけの問題ではないと思い
ます。たとえば「おばあちゃんがおみやげ持って来るわよ」な
んて言っていて、何も持って来なかったりとか……。そんな小
さなバカげたことから子どもというのはどうにでもなります。

いつもニコニコしているようになるには、おかあさんがまずニ
コニコしていただきたいです。

◆常に*espressivo*のある音を!!

生まれたばかりの赤ちゃんに対しても、何か実験した人もい
たようですが、そういうところに何か、すでに音楽を流すとかい
うのがいいんじゃないか、と思うんですけど……。日野皓正と
いうトランペットをやる人がいますが、どうしてあんなにリス
ム感があるのかと思っていましたら、お兄さんがタップダンス
を無理やりに習わされたんだそうです。(でもすぐに興味をもつ
たそうですが)それで弟も負けじとやって自然に二人ともリズム
ミカルになったんだそうです。

きびしくというのはよくないですけど、子どもの興味を失
わせないで、音楽をくりかえし聞かせるという方法が考えられ
ないでしょうか。母親が、ちょっと離れてさりげなく音楽を流
す、というようなことをしてくださったら、もつと何か心で歌
う、*espressivo* とかが育っていくんじゃないでしょうか。医学
的にも音に敏感な年齢があるんじゃないかと思えます。その時
代に、「ワーン」と音楽を聞かせる、というか、朝から晩まで遊
びの中でモーツァルトでも何でも、とにかく音楽を聞かせる、
ということですね。

二歳半から三歳ぐらいの子どもが、テレビの音楽などを聞いて調子よくからだでリズムをとっていますね。親よりもずっとリズム感がいいんです。こうしなさいとおしつけるんじゃない形で興味をつなぎながらやるのが大切です。テレビを見てからだを動かすというのは、テレビの中の人からだを動かしているから、自分もそのまねをしてみる、というわけで、テレビは絵と音がいっしょにくるので、これはやはり強いと思います。

これだけ色々なものが豊富にそろっているのです。私たちの時代にはテレビはなかったし、ラジオもNHKだけでしたから、良いものを聞くという機会にめぐまれていなかったわけですから、それにレコードだって少なかった。それがこれだけレコードもあり、何もかもあるわけですから、親のちょっとした心がけで、いい音楽をどうでも子どもに聞かせられると思うんです。

◆ 共に楽しむ姿勢を

公園なんかで見ていると、子どもは本当に音に敏感です。とにかくどんな音だって音楽にしようと思えばできるわけです。車が通る音だってそうです。おとなは全然気づかなくて、ただ雑音として聞いているのに、子どもたちはちょっとおもしろい鳴り方などすると必ず気がつきます。子どもの生活を、常にからだを働かせているようにもっていくことです。子どもはいや

な音には顔をしかめます。打楽器だって、母親がただたいてしまつたらそれきりだと思います。espressivo のはいい音を出すように考えれば、子どももだんだんと、軽くたいてみるとか、強くたいてみるとか、するようになります。子どもは、自分が何かいい音を出した時、たとえばテーブルの上のコーヒーカーップをチンチンとたたいたりした時、それがいい音だったりするとすぐうれしがるんです。そういう時、あまり「いけません!!」なんて言わないで、「いい音ね、だけどこっちもいいわよ」と楽器を出すとか、子どもが何かを感じるということを引き出すようにすることが大切だと思います。

「だめ」ということを言つたら子どもは伸びないような気がするんです。だから私も、ある程度大丈夫と思つたときに初めて「あなたはこういう欠点がある」ということを言いますけれどね。それまではほめたたえるんじゃないですけれど「ここはいいわね」というふうにしか言わないことにしています。

木琴など、何でもその辺においておけば、だんだんに音に興味をもたせることもできるんじゃないかと思っています。たまたまおかあさんもいっしょにそこにいて「ちょっとたたいてみようか」「おもしろい、おもしろい」とか言っている、そうすると子どももいっしょになって喜ぶ、といった情景を何回か見た

ことがあります。

私の妹の子どもが、私といっしょに声を出していたとき、ちよっと私がハーモニイをつけて三度上を歌ってやりましたら、それこそころげ回るようにして喜ぶんです。言葉では言い表わせなかったんでしょか。そして「もう一度」「もう一度」と言ってそのたびに喜ぶんです。母親がせめてこれぐらいのことをやってくだされば、声を出すという喜びもひとりで育っていくでしょうし、共に何かをしているという喜びも感じることができると思います。まず、音自体に興味をもたせるようにしていけばずい分違ってくるのではないでしょうか。その意味でおかあさん、先生というものは本当に大切だと思います。

◆音楽であれば何でも、いいものはい

音楽は感じるものです。ただ音だけだったらコンピューターにまかせたって音は出るようになっていきます。何か心から心へ伝わるもの、へたでも一生懸命歌っているとか、一生懸命わかってもらおうとしているとかが大切です。マヘリア・ジャクソンなども、声楽の見地からすればそれほど価値はないと思うんです。でも、何か心をうつものがあります。よっぽど変な流行歌手が小器用にやっているのよりいいですね。それが私たちだけがいいと思うだけでなく、近所の坊やが「あの変なおばさん、

カバみたいなの、よかったねノ」って言うんです。

いいものは子どもの心をつなぎとめるというのは本当です。いつか、バッハのマタイ受難曲（私らが聞いてもおしりが痛くなるし、外人でも聞きに行く時は座ぶとんを持って行くぐらい大変なんです）を文化会館でやりまして、歌い手、指揮者がよかったです。最初からしめつけられるようにいいなあと思いがから聞いていたんです。ひょいと横を見たら小学校二年生ぐらいの坊やが一人でできているんです。おかあさんがこれないで、高い切符だしもったいないので来たんだと言うんです。特に音楽をやっているわけじゃなくて、学校では笛をやっているらしいんですけど。こんなの、続くかしらと思って見ていました。のり出すようにして聞いているんです。とにかく最後まで聞いてました。どうだった？　たいくつしなかった？　ときくと、「たいくつしなかった、よかった」と言うんです。二分とじっとしていないような男の子をこれだけひきつけるものは何か。何か音楽独特の力みたいなのがあるんじゃないかと感じました。

音楽であれば何でも、いいものはいと私は思います。民謡なんか私も大好きですし、シャンソンもすばらしい。スタイルがよくて顔もきれいなら、もうカンツォーネ歌手ぐらい、ぜっ

たいになっていたと思うんです。とにかく、クラシックでなきゃダメだとか、そういう考え方はよくないと思います。子どもが変な歌をうたうから困るとかおかあさんはおっしゃいますが、何も歌わないよりいいと思うんです。とにかく観念でものを考えてもらいたくないと思います。

◆母親へ

あすはどうなるかわからないこの時代に、これだけは絶対自分のものだというものを、何か一つ子どもにもたせてやること、これは親の最低のつとめだと思うんです。みなさんお金を残すことは考えていらっしゃるけど、教育を身につけさせる、変に教育ママじゃなくて、自分もいっしょに勉強しながら自然に子どもの身につけさせてほしいと思います。今のおかあさんは勉強しなさすぎますね。母親が何かをやっているということは、子どもの誇りとなり自信となるものです。

私の知人でろうけつ染の大家がいますが、その家の男の子三人は、そろって「うちのママの作品」を胸をはって自慢します。家の中はもちろんひどい様子ですが、うちの中の仕事はご主人も子どもたちもみんなで分担しているんです。「料理はうちのママ、ダメなんだ」とハッキリ子どもたちも言いますが、何も軽蔑していないんです。子どもの尊敬をつなぐということを

今のおかあさんではできないんじゃないかと思います。絶対のものをもっている、勉強しているという姿勢だけでも母親がもっていれば、子どもは違ってくるものだと思います。

——ある日の午後、お茶の水大学の学生が三人で小野先生（国立音楽大学助教授声楽専攻）のお宅へうかがって、先生が日ごろから胸にためていらしたことをうかがってきました。——

記録 神・川井・高橋

こんな本 あんな本

関 治子

「幼稚園」

— 人間関係の 生活の場 —

K・H・リード 著
宮本美沙子 訳

幼児の教育は、経験浅い初心のころも、また年数重ねた時も、いつも、これでよいのだろうか、迷いが心の中をゆきまわっています。そんな時は、この本を読んで、この本と対談することになっています。

この原著は、幼児教育のテキストと

して、ひろく世界で利用されているようですが、この本の特徴は次の点に要約されています。

(一) 子どもの行動を観察し、理解しながら、子どものレイネスと個性を正しく見きわめていく。

(二) テクニクによるよりも、真の人間関係の樹立という態度に立脚しながら、子どもに接近する。

(三) 成長意欲の盛んな子どもの心身の欲求を満たしてやるような、よりよい学習の場を提供してやる。

(四) 子どもに接するおとなは、おとな自身が、自分を正しく理解し、成長していかなければならない。

子どもを教育するのに、現場の人間は、つい現実の目先の行動にとらわれてしまいやすく、理論家は理論的に思考してくれます。私たち現場の人間は、目標をあやまたずに現実に対処してい

なくてはなりません。

この本では、たとえば、どうやって人間関係の理解を深めながら子どもの要求に答えられるか、というようなことについて、その理論と指針が具体的にあげられています。

—— 自立精神を養う最大の機会を与えるために、助力は最小限にすること。最小限の助けを与えるということは、子どもが高い所のものを取ろうとする時に、それを取ってやることでなく、取るのに必要なものをどうやって準備するか、を教えることである。このことは、子どもに十分時間を与えて問題を解決させることであり、おとなはいりこんで解決してやることではない。独立しようとする子どもの強い成長への衝動を十分満足させるために、子どもに自信をもたせるようにする。しかしながら、子どもに物事をさせると

ものと考えます。

いうことは、子どもの依頼を拒否することではない。子どもは依頼によって、先生との人間関係を求めている。子どもに好意的で惜しみのない人間関係をもってやるのが大切である。他人から信頼され、価値づけられていると思えば自信が出てくる。子どもが助けを求めてきた時は、頼みに応じてやる。私たちは、子どもが必要としている助力だけを与えるのである。――

この中には、さらに具体的に場面があり、話し方や行動の仕方までくわしく書かれています。

幼稚園では、子ども同志、子どもと先生、子どもとおとなという人間関係が非常に重要であって、これによって子どもの成長発達がささえられている面がかなりあると思います。私たちは、この本を折にふれては読み返して、ヒューマンリレーションを大切にしたい

「もりのまつり」

中谷千代子

文・画

シカゴトリビューンの児童書フェスティバルで受賞というように、国際的に評価されている方です。

物語の背景は、北軽井沢の牧場。ここでの作者のたび重なるスケッチと、四歳になるおいごさんとの二カ月の生活の印象が、そのまま絵本になったようです。「ある秋、牧場のさくをはずしてウシがとび出し、ぞろぞろブタまでついて行き、番犬が先頭に立って近くの畑のあまいトウモロコシを、みんな食べてしまった」という牧場のおじさんの話が、ヒントになったそうです。

物語は――

牧場の動物の世話をするけんちゃん
と犬のタロは、毎日森へあそびに行く。
森で、かごいっぱい木の実や、やまぶ
どうを集めたおじいさんに出会う。「こ
んやは、森のおまつりをする。ぼうや
も、動物たちをつれておいで」と誘わ
れる。

夜になって、けんちゃんとタロは、牧場のさくをあけて、ウシ、ブタ、めんよう、やぎを森に導く。森の動物と、牧場の動物とは、トウモロコシを食べ、ごちそうをして交流し合う。おじいさんは、自分でつくったたくさんのおめんを出してきて、皆に好きなおめんをかぶらせる。たきびを囲んでおどりつける。けんちゃんは、ライオンのおめんをもらって、おじいさんと来年会おうと約束をする。翌朝、その森へ行ってみたが、おじいさんも森の動物もいない。――

物語は、牧場の生活から森の奥へ、ファンタジーの世界へとはいっていくのですが、はこびが、自然で素直であると思います。四歳児には、この物語の山とでもいうべき、森と牧場の動物たちがすきずきにおめんをかぶって、うしがとらになってもうもう、ぶたは

ぞうになってぶうぶう——というくだりが面白いと楽しんでいます。このように、実際に幼児のおもしろがるものと、ファンタジーの世界とのかね合いが無理がなく、たくみだと思えます。

絵はまた、一枚ずつが丁寧で美しく、色調の深みが、私たちの心を美しく洗ってくれます。一枚の葉の描写、また動物の表情の豊かさに、作者の観察力と暖い気持が、よく伝わってきます。

ぶたのねむっている顔など思わずうれしくなって笑ってしまいました。

全体を通して、朝の牧場から森の中、夜の牧場、たきびの火、早朝と、絵の中に光が忠実にあらわされているの印象づけられます。一つの絵本をつくるに当たって、子どもをよく知った上でのこの努力と誠意が、こうした良心的で、格調の高いものを生み出したのだと思います。

終りに作者の言葉を引用させていただいて、また素晴らしい絵本の生れることを願っています。

——「おとなが美しいと感じるものは、子どもにも美しいはず。子どもの世界だからと、やたらに夢の世界に飛躍するのはよくありません。ファンタジーの世界こそ、リアリティーがほしい。わたしは、草花の一本一本まで心をくばって描きます」――

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

手先の動きと子どもの感情⑭

清水エミ子

子どもたちの指先を、見つめなおして見れば見るほど、いろいろな事柄を指先、手先が伝えてくれることに気づき、驚かされている毎日のだが、今回は、一つの大切な部分、事柄に気づくことができた。

○今までは、なるべく具体的に指先の表われをよみとらなくては努力していたため、自由な活動（自由遊び）の中でひとりひとりがえらんだ活動の場での指先、手先の表われを多く見ていたようだ。

○集団で、友だちと同じ活動をしている時の指先の表われ、を見つめなくてはならない（ひとりひとりがえらんだ場、状態とは違う）ことに気づいた。こんなことに気づいて見なおすと、

○指先、手先の動き、表われが、心をまっさきに伝えてくれていることを、今までよりいっそう強くつかむことができた。

それは、子どもたちの活動を見ていると、静的な活動より、動的な活動のほうが、よりすなおに、はっきりと、指先、手先が心を表現している。動的な行動の場の方が、静的行動の場の表われより、明るく、喜びや意欲を伝えてくれることを知られた。

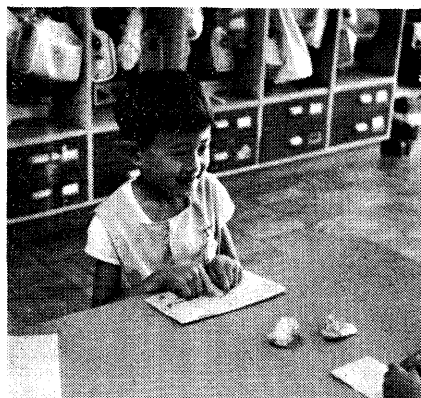
例①ゆきともの一斉活動の場での指先の表われ

小鳥作り（一斉の場での静的な活動）

封筒を利用して小鳥を作って遊ぶ、という活動をした時のゆきとは、

長細い封筒を机の上において、人差し指（左右いっしょ）で、トントン、トントンと小さきみにたたき始めた。（写真①）

口からは「ぼく、小鳥知ってるよ。ようちえんの十姉妹じゃないの、カナリヤのと、しんせきにいるんだ」と机の向かいがわの友だちに話しかける。言葉がスラスラととび出しているし、顔も困った表情ではなく、自然の表情をしていた。



写真(1)

しかし指先は、特に左右の人差し指は、「困ったな。どうやって作ろうか。どうしようか」と、不安ととまどいを表わして知らせてきた。
「べにすずめっていうのもいるね」と人差し指を動かすの

に合わせるように、言葉が口からとび出してきた。しかし指先の力はまだぬけていなかった。

・ゆきともへの働きかけ

一斉的活動なのでゆきともひとりだけに特別なあつかいができない。（彼の安定するタイプに合わせたいのだが）そこで、グループ、クラス全体、彼個人とだれでもがかかりあうことのできることで安定させ、活動を前進させなくてはと考え、ひとつの環境を示してみた。（写真②）

各々の机の上に、小鳥のからだを作る材料（紙くずを袋の中につめる）をそろえてみた。



写真(2)

ちり紙、新聞紙、などをおいた。
ゆきともは、環境としておいた紙の材料を、指先をかくそろえ、第二関節までをつかってなでみていた。
紙材料（環境）をさわることによって、



写真(3)

どうやり始めてよい
か、のとまどいが解
かれ、指先から力が
ぬけ、紙をまるめ、
袋につっこんでいっ
た。

この時のゆきとも
の指先、手先は、自
信をもら紙をわしづ
かみにして、封筒の

袋の中におしこめるようになった。

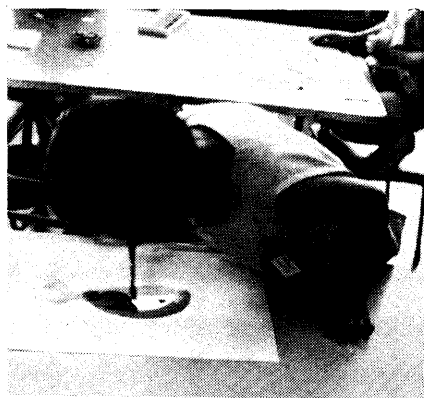
(写真③)

例② ふみ子・とも子の絵具画

魚をかこう (海底作りをした) の一斉活動の場

このふたりは、幼稚園入園以後なかよしになったため、いつ
でも近くにいたがるし、いつの間にかいっしょに活動している
仲間なのだ。

大きめの画用紙を前にし、赤の絵具を持ったふみ子は、左手
の親指全部を机の上に出し、ほかの四本の指は机のうらがわ
にまわされ、しっかり机をつかみ、不安ととまどいを伝えてき
た。



写真(4)

右の、絵筆を持った指も、手先も、宙にういてしまい、画用
紙の上にはなかなかのせることができなかった。

とも子は、左指先、手先は紙の上でなく、机の上に、第一、
第二関節を折りまげ、ぎゅっと力をいれておき、さあかこうか
な、という心の動きと、どうかこうかという不安の波を、第一
関節をビクビク動かすことで、まよい、とまどいを伝えてきて
いた。(写真④)

・ふみ子・とも子への働きかけ

ふみ子よりとも子のほうがかこうとする態勢ができていたし、
もう少し時間をかければ働きかけなくてもかき出したと思われ
るようだったので、
とも子に向かつて

保「とも子ちゃん、

ふみ子ちゃんに

この絵具をいっ

しょにつかって

かきましょと

さそってごらん

なさい」と、赤

色の絵具つぼを

さし出してみた。(ふみ子は赤色が好きなので)

とも子「うん、赤か、きんぎょみたいだね」と答え

とも子「ふみ子ちゃん、これでいつしよにかこうか」

ふみ子「うんいいよ。あたしこいかくんだ。赤いさかなはひごいなんだよ」

こんな対話の時の指先、手先は、らくになり、ダラリと机の上にのせられていた。

そこで、不安の解けたのをみはからって、かき出せるようなことばを考えた。

保「そのほか何色の絵具がいますか」

ふみ子「黒、黄色、白、目をかいて、さかなのもようかくんだもの」

とも子「からだは赤かな」

私はふたりのいりようだという色を、あき箱にとりわけ、机の上に環境としておいてみた。(この場合ふみ子・とも子に準備させたのでは緊張は解けない)

ふみ子「全部使えるんだね」といいながら全部の絵筆でコトコト絵具入れのそこをつついてみて、絵具をかきまわしてみた。この時の左手の指は、かるくそろって机の上ののっていた。

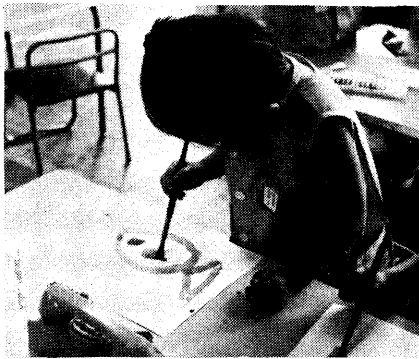
とも子が「さあ、かこうか」と声をかけたのを合図に、ふみ

子は赤の筆を画用紙にのせ、一気に魚の形をかいた。

この時は、先ほどの左の手指と同じように、親指が机の上、ほかの指は机のうらがわにまわり、力を入れて机をおさえていた。机の上の親指一本で画用紙が動かないようにおさえていたのだ。また緊張が見られたので

保「ふみ子ちゃん、かわいさかな、こいかな。たのしそうに泳いでるみたいね」と声をかけてみた。そしていつもいじっている電話のおもちやをとって机の上ののせてみた。このあとは、左手全部を机の上にのせて魚のからだをぬりつぶしていた。

(写真⑤)



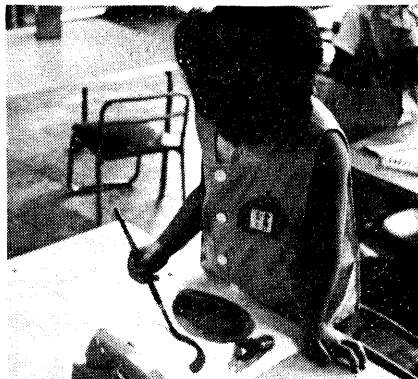
写真(5)

つぎに、絵具がかわかないうちに、さかなの目をかいてしまい、絵具がにじんだのを見たふみ子の指先は、

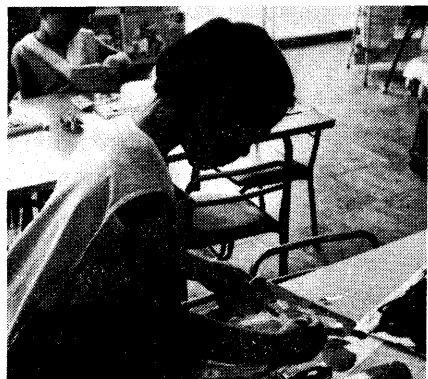
からだの横においてあつたいすの背をにぎりしめ、しまった、これは失敗だと



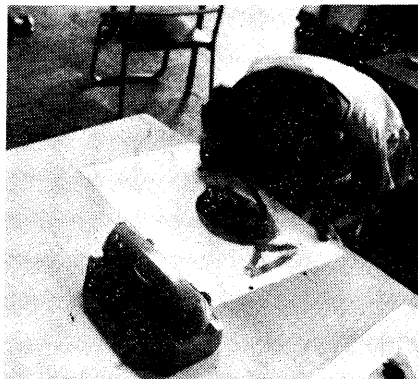
写真(8)



写真(6)



写真(9)



写真(7)

いう苦しみを伝えてきたのだが、この時の顔も、からだ全体からも、苦しみやとまどいは感じられなかった。かえって、「このさかな、泣き虫こいなね。あついよ、えーんえーん、てなっているの」などと、失敗をまぎらせるためなのか、おどけた言葉と、中途半ばな笑いすら感じられた。

この時、とも子も指先をさかんに動かして、心のみだれ、不安を伝えてきたので、よく見ると、さかなのせんとバックをぬった絵具がにじみ合ってしまったていた。

するとふみ子が、黒の絵具をとも子に示し、「よるの海にすればいいじゃない」と声をかけた。とも子は、手で黒の絵具を取り、黒波をかき始めた。

左手は、まえと同じように第一、第二関節がおりまげられて机の上にあった。

保「夜は、泳ぐとききをつけなくちゃね。海の草にひっかかりますよ」ととも子にいうともふみにいうともなく声をかけた。

その時、とも子の手先はらくに自分のほほにあてられ、「海の草ってわかめだね」といって、海藻をかきたしていた。

この二人が絵具で魚をかく活動を見てもはつきりわかるように、

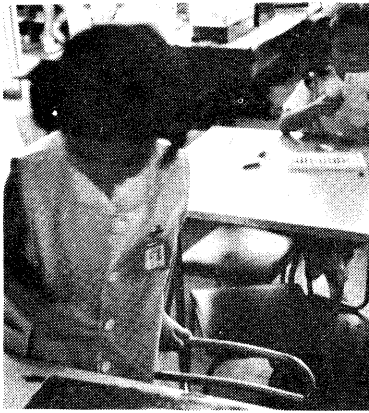
・保育者が示す環境の刺激によって、不安やとまどいを少しでも解決していくことができるのだ。次の瞬間、また緊張やとまどいを、指先はいちはやく表わし、次の指導、環境を要求してくるのだ。

言葉でのよびかけだけでなく、物による環境を示していくことをいっしょに指導していくと、より早く不安やとまどいが解決していくことがわかった。

決していくことがわかった。

環境として示した場合、そのものに一番早くふれることのできる指が、一番すなおに、さわったり、つかんだり、そっとよりそったりすることが安定し、前進していくことができたようだった。(写真(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12))

例③ かおるのさかなやのお金作りの一斉(グループでの活動の場



写真(10)



写真(11)



写真(12)

さかなをかいいたグループが、さー、いらっしやい」とかさながら売声を出したので、かおるのグループは

「あたしたち、さかなやさんのお金作ってかいてゆくね」

と提案し、折紙を持ってきてお金作りを始めた。(写真(13)(14)

はさみを持ってお金を切り始めようとする時の指先は、緊張と不安をピクピクと伝えてきた。左手の折紙(お金がかいてある)を持つ手先、指先は、ひっきりなしに動き、紙を落としそうになっていた。

この動作は、自分が進んでやろうとして、自信をもって始めた活動のため、顔や口はたのしそうにとりなるM子に



写真(13)



写真(14)



写真(15)

「たかいかな、あのさかな」と話しかけて笑ったりしているのだが、左手の指先は紙やはさみを持っていても、ピクピクと動き、不安を伝えてきている。

私は大いそぎではかの折紙でサイフを作り、机の上におき保「この中に入れませんか。お金をたくさんにしてください」と声をかけてみた。(写真(15)(16)(17)

かおる「アッ、おさいふ、おさいふだね」と左の手のひらで、さいふを、ピシャピシャたたいてみた。そしてとなりのみよ子に「いっしょにいれる?」と話しかけた。

このあと、かおるもみよ子も、指先の力をぬき、らくに、た



写真(16)



写真(17)

のしんでお金（十円、五十円、百円）を作ってさいふの中に入れて、さいふのふくらみをたのしみ、お金を入れてはさいふをたっていた。

かおるの、紙を切る時の指先の不安を、正しく読みとらなかつたら、かおる、みよ子はなかなかお金を切れず、切ったお金も机の上にのせただけで、ためる、たくさんになる、という喜びを知ることができずに終わってしまったのではないかと思われるのだ。

指先の緊張、不安をよみとったので、さいふという環境を示すことができた。そのため、たのしんでお金を作り、さかなや

れた。

例④ まさひこがからだ全体を動かしている時の指先

子どもたちの指先を見つめていると、不安やとまどい、緊張、などに多く気づくことができた（よみとりやすいので）が、喜び、意欲などという積極的な表われのよみとりができにくかったことに気づいた。

顔やからだ全体での喜び、意欲の表われより、指先での喜び、意欲の表われはおそいのだろうか、などと思えてきた。喜び、意欲の表われをつかうという気持で、指先、手先を

さんごっこに発展してゆくことができた。
（このあとかおるとみよ子は、さかなを入れる袋を新聞紙で作っていた）

静的活動をしている時は、特に正しいよみとりが、正しい時をつかませ、正しい環境を気づかせ、活動を発展させることができる。子どもたち自身が活動を展開させてゆくエネルギーが生まれてくるのだということを、このかおるたちのグループのお金作りをみて強く感じさせら

見つめてみると、私の、指先、手先の見つめ方に、かたよりのあったことに気づいた。

今までは、ついよみとりよい、見つめよい、静かな場面での見つめ、よみとりが多かったこと、動いていても、手先、指先をよみとる時の瞬間は静的であったことに気づいた。男の子も女の子も動きまわっている時の指先、手先の見つめ、よみとりをしていなかったのだ。

まさひこがよしたかと、怪獣ごっこをしていた。自分たちで好きなレコードをかけて怪獣と正義の味方になって戦っていた。

この時のまさひこの指先は、今までみおとしていた指先の動



写真(18)



写真(19)

きを知らせてくれた。むだな力はまったく入っておらず、らくに、リズムカルに、指全体が調和のとれた動きをしているのだ。快い、喜びの表われなのだ。ピクッと動くのではなく、ゆっくりそっと動いている。(写真(18)(19))

フィルムにおさめて見るのでないと、文字や言葉では表現しにくい、ゆったりとした表われをしているのだ。

怪獣になって相手にいどみかかっていく時なども、意欲のある指先の動きのため、はげしさはあるがこきざみに、ぎこちなさのない動きをしている。それに、指が一本一本バラバラに動くのではなく、喜び、意欲を表わす場合は、五本あるいは四本が、いっしょに同じリズムで動いていることをよみとった。

不安、とまどいは、力がはいり、一本一本がバラバラに動いたり、まげられたり、つまんだり、という表われが多かったが、快、喜びなどは、いっしょにゆっくりと動き、まげ、つかむという表われになっていた。どんなに全身の力を入れて動きまわっても、たのしみ、喜びの心で動いている時の指先、手先は、らくに、やわらかく、力

をぬいて動いている。

しかし、動いているうちの、どんな小さな不安、緊張も、手先、指先は間違ひなくつかみ、それを瞬間に表わしている。

相手の手が自分の頭にうちおろされそうになった瞬間、手先には力がいり、自分の頭上にもち上げられ、それをおける動きになっている。

頭の上にもち上げる前からの横、あるいはそのある場所、ピクッと合図がはいり頭の上に動き始めるのだ。

このように、瞬間に伝わる心の変化を見つめ、物や言葉でまちがいのない環境を示し、そなえることによって、子どもたちがスムーズに活動を展開してゆけるのだと気づいた。絵をかいているから絵具が環境になってゆくのではない（絵をかくことに関係のあるものが環境ではない）ということも今回の指先の見つめで教えられた。絵をかくことに関係のないおもちゃの電話が、よい環境、心の安定をとりもどすのに必要であったことなど……。

その子、ひとりひとりが、気持よく動きまわり、現在の場合より成長し、何かを人生の経験としてつかみとることができるために、指先、手先の表われを見つめ、顔やからだ全体でよみとれない要求を知ってゆくことが大切だと思う。（蒲田幼稚園）



小学校入学直前の幼稚園の生活(三)

お茶の水女子大学
幼児保育研究室



幼稚園生活の最終期であるこの三学期を、子どもたち一人一人は、どのようにして自らのものとしているのだろうか。

さまざまな新しい価値との出会いに心をおどらせる子ども、力を合わせて成し遂げる大きな営みに全身をぶつけていく子ども、自分の世界を整理し自分なりのまとまりを作ろうとする子ども等々、これらの姿のなかには、目を見はるような鮮やかさで幼稚園生活が開花している。

ここでまた、幾つかの観察記録を手がかりとしながら、この時期の子どもの姿を考えてみることにしよう。(本田和子)

一 さまざまな価値との出会い

◆文字を使って遊ぶ その一

二月一日 M夫は幼稚園にくるとすぐに、きのうやっていた

くじびきの箱を探して持ってくる。M夫「これくじ」そこに男児が四人よってくる。M夫「もう一つあるよ」と箱を持ってくる。H夫とM夫はくじびきの箱をずらりと並べながら、ひろみの「み」とまさみの「み」は同じだねと話している。(ここでは、一つの文字を抽出して同じ字であることを確認している)

M夫は細長い画用紙を出して、ひらがなを書き始める。H夫はそばに来て見る。「てんとうむし」と書く。もう一枚「しゅうまい」と書く。H夫はそれを見てゲラゲラ笑う。(これは、くじびきのあたりの賞品を示すもの) 次の紙には「はずれ」と書き、次の紙には「ふぐ」と書く。H夫はそれを見てまた、ゲラゲラ笑う。

次の紙には「りんご」と書く。そこにK夫も来て「はさみ」と書く。M夫とH夫がのぞきこむ。K夫は「まっこうくじら」

「でぶぶく」と書く。M夫が「ばか」と書くと、K夫も「ばか」と書く。M夫は「たこ」と書き、K夫に見せておもしろそうに笑う。次にM夫は「ういうつくしげみ」と書いて、「ちよっと」とS夫を呼び、ささやいて見せる。そしていっしょにゲラゲラ笑う。

この記録に見られるように、はっきりした輪かくのない言葉を、ひらがなで書いて、二人の子どもがゲラゲラ笑い合っている。その語のもつ音がおもしろかったり、その語の内容のもつイメージがおもしろかったりする。そして、次々に面白い語をひらがなで書いて楽しんでいる。こうして、笑い合ったりふざけ合ったりする中に、文字がとり入れられていく。(津守真)

◆文字を使って遊ぶ その二

三月八日 きょうはシンデレラの音楽劇遊びがへやいっぱい広がっている。にぎやかではなやいだ空気がへや中を支配している。しかし、K夫は、劇には背を向けて、ひとりでスピードくじ作りを進めていた。画用紙を切り、一枚一枚に言葉を書いて折る。それを箱に入れて、ほかの人に引かせるのである。

K夫は、画用紙にマジックで石を積み重ねるようにひとつひとつ四角いわくを書いた。それから一枚切り取っては言葉を書き入れ、また次の一枚を切り取っては言葉を書き入れる。こう

してくじを作ったため、くじを作り終えた時には、画用紙のきりくずは階段状に残されていた。

はじめに短冊型の小さい紙片をたくさん作っておいて、それに言葉を書き入れるのが、普通のおとなのやり方である。このようなおとな的方法とは異なったこの子どものやり方が、興味深く思われた。

(中村美智子)

子どもたちは、さまざまな遊びの中で「文字」と出会い、それとかかわりをもつ。ここでは「くじびき遊び」の中にそれを取り入れている。文字は、まごうかたなき文化遺産であり、文化的に「価値あるもの」である。

ところで、子どもたちにとって、文化遺産とは「伝達さるべきもの」であり、価値とは「受容すべきもの」なのであるうか。自分たちの遊びの中に大笑いしながら文字を取り込んでいく子どもたちや、「くじをたくさん作ろう」という自分なりの課題のもとに、文字を使っていくK夫の動きからは「価値を受容する」といった受け身の姿は引き出しにくいのではないか。

また、文字が自由に使えるその同じ子どもが、くじびき用の紙を一枚ごとに切り取るという、物に即したふるまい方を示している。ここにも、この時期の子どもたちの独特な発達の姿がうかがえる。

(本田和子)

◆美しいものの追求 その一

三月八日 霜で遊んでいる子どもたちを見ると、K夫はひとりで霜を取りに行った。両手に持てるだけの霜を持って帰ってくると、「おい、もつと霜とってくるな」と大きなビニール袋を持ってかけていく。取り終わると「ぼくが取ってきたんだぞ」と言いながら、眺めては持ち歩いた。H夫のそばに寄っていつて「ぼくお水の中へ入れておくんだ」と、水を入れたバケツの中に袋ごと浸す。(記録略)

やがて、K夫はビニール袋にさまざまな色のマジックで水玉模様をかき息を吹きこんで口元をリボンでしぼる。「ほら、きれいでしょ」と皆に見せて回る。

三歳児のへやに行き、「よかったらこれあげようか」と、小さい子に渡し、小さい子が嬉しそうにかけていくのを見送る。

K夫はひとりでも嬉しそうに「ああいうのもっと作ろう」とへやに帰る。へやにもどってから、誰にもなく「ああいうのいっぱい作ろう」と言いながら、同じようなものを作る。

「おみやげじゃないもん。こんどは自分の。この中にね、赤い実や何か入れるんだ」と持ち上げて眺める。

(中村美智子)

◆美しいものの追求 その二

二月一日 一〇・〇六―一〇・一四

へやにはいつてきたI夫が、保育者の手もとに目を止める。

保育者は、淡い色の薄紙でリズム劇の小道具を作っている。紙がヒラヒラと動く度に、I夫の表情がゆらめく。微笑とも、あこがれともつかない何かが、ゆらめいて消える。(記録略)

I夫は絵本のコーナーに近寄り、一冊抜き出して表題を読む。「大きなりんご」それをもとにもどし、また一冊抜き出す。チラと見てすぐもどす。立ったまま、視線をへやの中央にさまよわせる。へやの真中では、女兒がシンデレラのレコードに合わせてクルクル回っている。薄紙のボールがヒラヒラする。

I夫は、ふと、一冊の本を抜き出し、それをじっと見る。胸にかかえて二、三步歩き、またじっと表紙に見入る。へやのすみのいすに腰をおろし、しみじみと表紙の絵を眺める。表題を読むともせず、頁をくろうともしない。ただ、美しい色調の絵をじっと見つめている。(本田和子)

K夫の場合、戸外の霜の美しさにまず魅された。「霜のきらめきをいつまでも」という願いが、袋に入れて水の中につける行為となって現われる。しかし、霜の寿命はさほど長くない。すきとおる美しいものに魅された心が、ビニール袋に美しい色で絵をかくという行為を生み出していく。そして、美しいものに感動した心が「幼い人と分かち合う」という優しい行為へと

つながっていく。

I夫はまず、保育者の手もとでヒラヒラする薄紙の動きに引きつけられた。この時のI夫には「対象を美しいと認める」といったような精神活動のまとまりはない。ただ、美しい動きに共感して、心をそよがせている。絵本のコーナーと向き合った時、I夫の心のこのそよぎが、初めて形をとってまとまった。

そして、あれこれと迷った揚句手にした一冊の本が、すなわち「美へのかわきを充たすもの」だった。

目に見える現象として「子どもが何をしているか」を考えるのではなく、その底に流れる「子どもが追い求めているもの」に目を向けるならば、これらの姿は限りなく貴重なものと思われる。

(本田和子)

二 全身でぶつかる

◆大きな山づくり

九・四二 男女児七人が、くまでとシャベルで砂を掘っては山につんでいる。それぞれが、全身の力で掘っている。女の子が、砂を掘り返す役割になる。どこから男の子二人が、「白砂できたぞ」とふるいでふるった砂をもってきて、山にかける。

九・五二 みんな白砂つくりに移って、山のそばにはだれも

いなくなる。(記録略)

一〇・〇〇 また、山にはだれもいなくなる。砂場の近くで、白砂作りが続いている。四歳児が「あのお山ね、ぶっこわしてやるぞ」と言って通ると、白砂作りをしていたひろみつがその子の方をにらむ。放ってはあがるが、みんなにとって大事な山のようである。(記録略)

一〇・二〇 IY夫が山をへらでたたきながら、「トンネル作ない方がいいぞ。すぐ、こわれるんだから」と言う。だれかが「まだ早いよ」と言う。「かたまってから掘った方がいいよ」などと話している。ついに、K夫がトンネルを掘り始める。HK夫も掘り始める。

一〇・二八 保育者が砂場に来て、「ああいいのができたわね」と言いながら、一人一人の袖をまくる。

HY夫は、反対側でトンネルを掘っているH夫に「H夫ちゃん、つなげよう」と言う。K夫は「かたいな」と言って、立ち上がって、反対側のHM夫に「HM夫ちゃん、ぼくとHMちゃん、まだつながない」と言う。HM夫は「ぼくとK夫とつなぐのかすごい」と言って掘り続ける。今度は、HM夫が立ち上がった、「K夫、がんばろうぜ」と言う。ここでは、現実につながる可能性は問題になっていない。つなげようとする、一人

一人の意欲で、掘り進められている。

一〇・三五 K夫「まだ、H M夫ちゃんとぼく、全然通じていない。だって、一メートルくらいこの山の長さあるんだもん」と言う。H M夫「H夫もK夫のところ掘れ」

H夫は、K夫の掘っている穴に手を入れてみて、「こんな深いのはじめてだ」と言つて掘らない。K夫は、H夫のシャベルととりかえて掘る。H K夫「どうしても、K夫とつながらないな」K夫「まだまだだ。H K夫ちゃん。どのくらい掘った」そろそろトンネルがつながらない現実には気づき始めている。

一〇・四〇 H夫「おれ、なかなかつながらないから、やめた」と言う。ほかの子も「ぼくやめた」という。(記録略)

「次の日」 九・四〇 きのう山作りをした子どもたちが山のまわりに集まっている。H M夫「どんどんでくししよう」K夫とH M夫、山をたいたたり砂を盛ったりする。H M夫は、砂のかたまりを山にぶつつける。K夫はせつせとたたく。

九・五五 M夫がきて、山に体当りする。H M夫は「よいしよ」と言つて山に登る。M夫も登る。山が大きくなりすぎて、どうにもならなくなった感じである。

一〇・〇〇 山のまわりには誰もいなくなる。

大きな山作りは、水曜日ごろから始まっていた。金曜日には、子

どもたちと山とが一体になって動いていて、十分に楽しんでいた。次の日になると、大きく大きく思つて取り組んだ山が、山の方で勝手に大きくなりすぎてしまつて、子どもたちの手におえなくなつてしまつたようであつた。

月曜日には、また新たな取り組みが期待されたが、砂場の工事のため、取りこわされてしまつた。登園したK夫が、すぐ砂場に出ていつて「あれ、変だな」とつぶやいていたが、この「山とのたたかい」は、子どもたちの中かなりの比重をもつていたのであろう。

(秋間直美)

◆にわとりを追いかける

二月一日 戸外で男児七人がかけまわっている。あみの外に出しているにわとりをつかまえようとしているのである。七人は夢中でかけまわる。M夫は、用務員室からえさを取ってくる。みんなで追いかける。M夫は、カウボーイのように、にわとりになわをかけようとふり回す。にわとりはつかまえることも出来るし、追いかけていくと、思いがけない方向に逃げる。手を出してつかまえそうにするが、こわごわなので逃げられてしまふ。急に、ほかのにわとりの背中に飛びのくこともある。

子どもたちは、にわとりを追いかけることにより「変化」を追つて走り回る。大気の変化の感覚を楽しんでいると言つてよ

いであろう

(津守真)

室内で文字遊びに興じ、絵本の美しさに魅される同じ子どもが、砂山に体当たりし、息をはずませてにわたりを追いかける。原始さながらの大自然の子どもとして過ぐすひとときである。

原始と文化、これは子どもにとっていずれも大切な側面である。
(本田和子)

三 「したいこと」と「よいこと」の統合

◆遊び道具を片づける

一一・〇八ごろ 男児五名が砂場で「実験室ごっこ」をしている。
(記録略)

ブランコの空いているのに気づき、「しゅうちゃん、今ならブランコあいてるぜ」「やろうか」パツとかけ出して行く。

一一・一五ごろ 砂場で「お団子やさん」をしていたY子とH子、そろそろへやに入りたくなる。

Y子「あたしおへやで遊ぶわ」H子「じゃお片づけしない。あたしたちの遊んだとこ」
(記録略)

二人は自分たちの遊び道具を片づけ、男児たちの遊んだあとを片づけかけるが、途中で止めてへやにはいる。

一一・四〇ごろ 「お片づけ」の声でみんなが各々の遊び道

具を片づける。一度へやにはいつていたY子とH子がまた砂場に出てきて、「実験室ごっこ」のあとを片づけ始める。

H子「男の子、うるさいかしら」

Y子「そうね、なくなったなくなつたって言うかもしれないわね」二人は一寸ためらって、茶碗の中の液体などはこぼさぬようソーツとかごに並べる。

Y子「捨てないでいいいわね」

からの茶碗などは丁寧に水で洗ってかごに揃えて入れる。二人でかごをソーツと持ち上げ、棚に並べる。

保育者が出てきてびっくりする。「アラアラ、まあまあ、本当にきれいに片づいたこと。まあ」二人顔を見合わせてニッコリうなずき合う。Y子たちは、自分の遊びが終わったとき、きちんと道具を片づけた。男児たちの遊びのあとを片づけたが、すぐにちゅうちょしている。それは、男児たちがまた遊び続けるかもしれないからであり、ほかの子どもによつてはまた片づける時期がきていないことに気づいたからである。

「お片づけ」の声が聞こえたとき、Y子たちはまた砂場に出てきた。それは、もう午前中の遊びはすべての子どもにとって終わったのであり、道具は片づけられるべき時だと判断したためである。

二人は、自分たちの行為を、みじんも「よき行ない」ととらえていない。むしろ、極めて遠慮がちなためらいが強く見られる。それは、もしかしたら午後からも遊び続けるかもしれない他人の領分に手をふれてしまったためらいである。「他人の遊びをこわしてしまうようでは申しわけないが、午前中の遊びは終わったので、一応きちんとしておきたい」という二人の気持の現われであろう。

二人の片づけ方は決してお座なりではない。細やかに心を配りながら、実に丁寧に片づけていく。この二人にとって「片づけること」は、「ねばならない」という規則として自分たちを縛るものではなく、「きちんとしたい」から出てくる行為である。きれいに洗われて並べられた道具や、片づけ終えた砂場のたたずまいを見ることに喜びがある。「ああきれいになった」という喜びを体験するために、自分たちで「きれいにしたい」のである。

保育者の示した感嘆に二人が見せた満足の笑いは、「善行を認められた得意さ」ではなく、むしろ「喜びを共有出来た嬉しさ」である。しかし、保育者と喜びを共有し合った体験は、子どもの中に一つの価値として位置づくであろう。「あれは先生も喜んでくださるよいことであつたのだ」と。

「片づけ」は、「ねばならないこと」として習慣化されるようなものではない。「周囲の人やものを大切にする心」に支えられて、「自分たちの遊び相手である『もの』を大切にしたい」心の表現として、子どもから出てくるのが本来の姿ではないのか。そして、結果として「したいこと」が「よいこと」に重なるならば、それは人間の理想の姿といえよう。

(本田和子)

幼児の教育 第七十巻 第十号

十月号 © 定価一〇〇円

昭和四十六年九月二十五日印刷
昭和四十六年十月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

編集兼 発行所 津 守 真
お茶の水女子大学附属幼稚園内

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

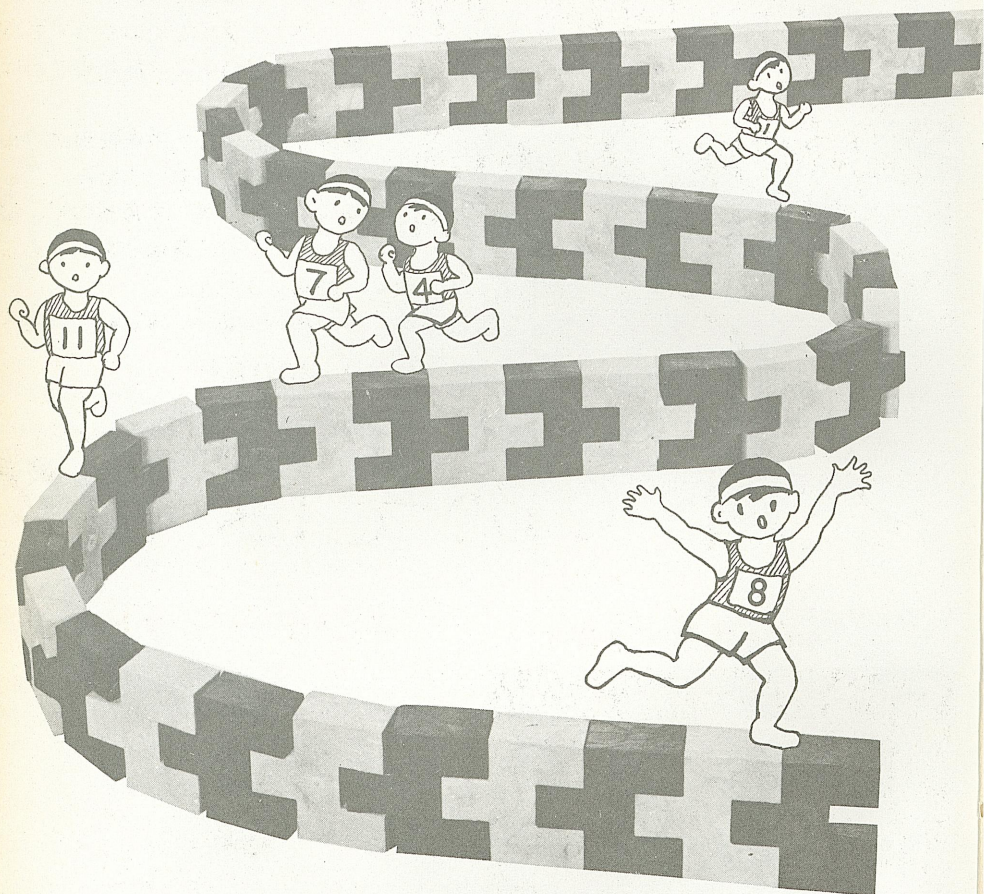
東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

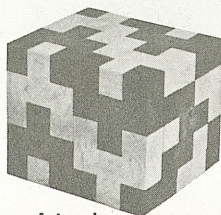
◎ 本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします

世界のマラソンレースは、42.195キロメートル。
キンダークロスブロックも
 おなじ長さになりました。



特長

積む、組む、はめ込むという3つの方法でいろいろな形をつくることができます。材質は世界で初めての低発泡スチロール樹脂。伸縮性がなく組み合わせはピッタリ。割れたり、ひびがはいったりしない丈夫な遊具です。

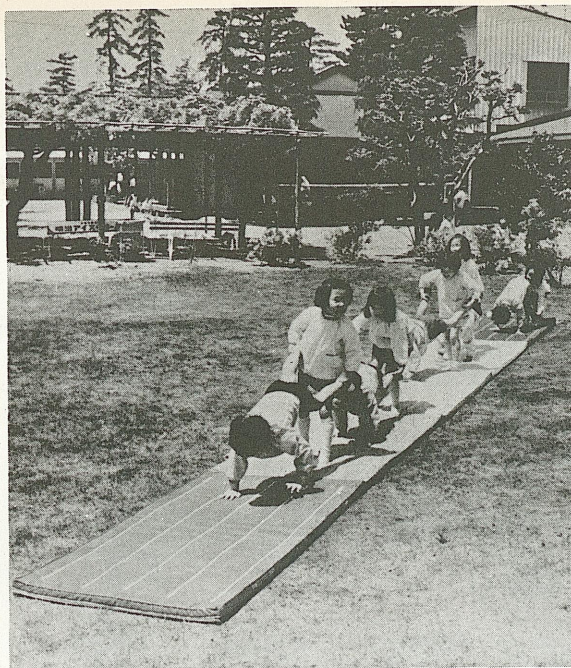


Aセット

Aセット 24個1組
 ビニールケースつき 980円

Bセット 48個1組
 ビニールケースつき 1,950円

Cセット 108個1組
 ナップザック(整理袋)つき 4,700円



キンダーカラーマット

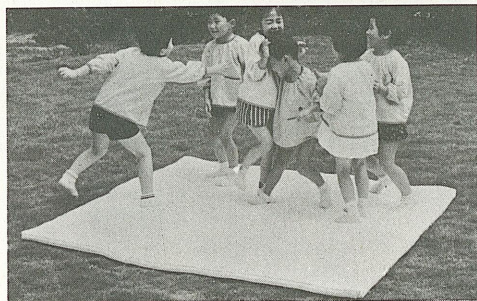
- 鮮やかな色彩のキンダーカラーマットは、マット運動をグリーンと楽しくします。
- キンダーカラーマットは、赤・黄・白・水色・青の5色があります。
- マットの両端についている、マジックテープで縦にいくつでも連結でき、運動中にはなれることはありません。
- 超強力ナイロン糸を使用!! 丈夫で、色落ちがありません。
- 防水加工を施してあるので、湿気を含んだり、腐蝕したりすることはありません。

長さ180cm・幅90cm・厚さ4cm・各色1枚

9,900円

マットであそぼう!!

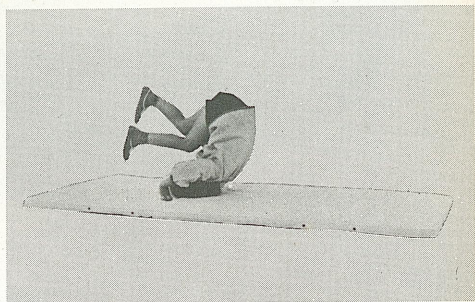
キンダースクエアマット



サイズは180×180cm、いままでの長方形のマット2枚を合わせた大きさですから、活動面積が大きく、おおぜいで遊べます。

19,000円

キンダーマット (A)



幼児のマット運動のために理想的な大きさ・厚み・品質です。運動会には持ち運びが簡単で、とてもよろこばれます。

長さ1.8m、幅90cm、厚み3cm。9,200円